

---

# 異世界で武器行商人始めました

ボナンザ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界で武器行商人始めました

### 【Nコード】

N7694X

### 【作者名】

ボナンザ

### 【あらすじ】

昴が目覚めるとそこは異世界だった。そして何故か手にしていた能力『武器生成能力』。それはあらゆる素材を武器に変えることのできる不思議な力だった。昴はその能力を駆使し、新たな世界を旅していく。

## 01話 いきなりの異世界で

死んだ後どうなるか、というのは人間にとって永遠に答えのない命題である。何故なら、死んだものは決して生き返らないからだ。しかし今年、<sup>よわい</sup>年齢17になる少年、<sup>すばる</sup>昴はその答えを見つけることができる。

「なるほどね。人間死んだらどこか違う世界に飛ばされるんだね」

いきなりの発言である。

しかしそれには理由があった。

今、昴がいるのは深い森の中である。

周りには樹齡千年を越すような大木がごろごろと存在しており、空は葉に覆われて見えない。そんな場所である。

そしてこの場所、昴には全く覚えがない場所だった。

日本の樹海として有名なのに屋久島があるが、ここはそれをはるかに超えている。もつと原初を色濃く残した、手付かずの自然である。

そしてそんな場所に不自然なものが二つ、昴の目の前に目立つように置かれてあった。

まず一つ目。

それは説明書であった。

何の説明書かといえば、この世界の説明書である。

とはいえ説明書とっていいのか疑問が残るほど簡潔なもの、たった一枚の紙切れだ。

誰が書いたかは定かではない。昴は神様だと勝手に解釈しているが。

その内容はこうである

説明書

あなたは死にました

そしてこの世界にやってきました

- ・ここは地球上とは異なる世界です
  - ・いわゆる剣と魔法の世界です
  - ・言語は日本語です、安心しましょう
  - ・しかし風俗は違います、これから勉強しましょう
  - ・あなたに特殊な能力が付加されました
- それは『武具生成能力』です

この世界に存在する物質に触れることで、イメージに従って加工することが出来ます

特殊効果等も付けることが可能ですが、その性質は被加工物によって左右されます

注意：生物は加工できません。一度生成したのもも再び加工できません。

以上です

それでは良い第二の人生を

あまりにも突拍子も無いことが書き連ねてあるが、昴はこれを信じた。

なぜなら昴に残っている最後の記憶は、目の前に迫ってくる暴走トラックの姿だったからだ。

ブレーキをかける気配はなかった。

それにあのタイミングでは焼け石に水だろう。

よくて重体、悪けりや即死。こんな五体満足で、ピンピンしているはずがないのだ。

すなわち、ここは一風変わった天国、もしくは地獄なのだと解釈できる。

それならば意外とすんなり受け入れられる昴だった。

そして二つ目の置かれていたもの。

練習材料と書かれた紙が貼られてた、鉱物だった。

昴はそれに触れてみる。

すると脳内にある情報が流れこんできた。

素材：グランド産鉄鉱石

レア度：

特殊付加項目：方位磁針

それはこの鉱物の情報だった。

詳しい事はわからないが、何となくは理解できる。

このレア度が一体どれくらいなのかはわからないが、それなりの価値はあるようだ。

そして特殊付加項目の『方位磁針』

これは今から作る武器にこの能力を付加し、森を脱出しろということなのだろう。

貼られていた紙には、ご丁寧に「南へ五里。道へ出る」と書かれてあるからだ。

「ふむ」

昴は鉋物を手に取り考えることにした。  
もらった能力は『武器生成能力』である。  
ということは作れるものは武器か防具に限るということだろう。  
となれば、その中で何が最良か。  
やはりシンプルに剣だろうか。

昴は数分考えた後、ひとまず鉋物を地面においた。  
最初は何か別のもので試してみようと思ったのだ。  
この鉋物がどれぐらいの価値有るものかわからないため、できれば慎重を喫したい。

昴は地面から土を掬った。  
最初はこれで試してみよう。

「……………」

しかし特に反応しなかった。  
昴は首を捻った。

何がいけないのだろうか。  
土は素材として不適格なのだろうか。  
ならばその境目はどこになるのだろうか。  
いくつかの疑問が湧き上がるが、昴はそれをひとまず保留する。  
昴は今度は、脇に落ちている樹の枝を拾ってみた。

「……………」

これもまた反応しなかった。  
しかしこれは先ほどと条件が違う。  
木は生命体である。ならば加工物として不適格なのかもしれない。  
それならば納得できるのだ。  
しかし一応と、昴はもう一度樹の枝を握りしめ、この物質の情報

を把握しようと努力してみた。

素材：平凡な大樹の枝

レア度：

特殊付加項目：なし

「おおつ、いけるじゃん」

すると今度は見事情報が流れてきた。

昴は先程と同じく、土を掬い取る。

素材：平凡な土

レア度：

特殊付加項目：なし

今度もまた情報が流れてくる。

そして昴は理解した。

どうやら触れたものを調べようと念じないと、情報は流れないらしかった。

考えてみれば当然のことだ。

触るもの触るもの、いちいち情報が流れてきたら、煩わしいことこの上ない。

昴は一通り辺りのものを拾っては調べてみる。

そして素材として使えそうなものは、以上の4つだった。

素材：グラード産鉄鉱石  
レア度：  
特殊付加項目：方位磁針

素材：オーランドールの幹  
レア度：  
特殊付加項目：なし

素材：オーランドールの根  
レア度：  
特殊付加項目：腐敗防止+1

素材：上級腐葉土  
レア度：  
特殊付加項目：耐水属性+2

ちなみに、試しにとそこの土で手袋を作ってみたが、まったく使い物にならなかった。

伸縮性に欠け、ポロポロとすぐに崩れ落ちるため、使い捨て程度の性能だったのだ。

まあただの土でそれほどの物が作れるのは脅威であるのは間違いない。

昴は集めた素材を持って、出っ張った木の根に腰を下ろす。

「さて、この4つで何を作るか……」



余り考える時間はなかった。

ここは深い森である。

一夜を過ごすサバイバル能力は、現代人の昴にはない。

それにこれから、南に五里も歩かなければならないのだ。

足場の悪い獣道を進まなければならないだろう。ならば時間は多めに考える必要がある。

昴は覚悟を決め、最初から用意されていたグラード産鉄鉱石を手取る。

「よし、やるか」

昴が選んだのは、シンプルにナイフであった。

理由としては二つある。

一つは、素人にも扱いやすく、怪我をしづらいもの。

そしてもう一つは、鉄鉱石のサイズによる容量的な問題だ。

先ほど土を使い手袋を作った時に試してみたのだが、少量の土でつくろうとすると、確かに手袋が出来はするが、薄くペラペラなものしかできなかった。

当たり前の事である。

どうやらこの能力はある程度体積としての融通が利くが、出来の善し悪しにもろに反映されるようだった。

昴はグラード産鉄鉱石を抱え、念じる。

イメージするのは鋭利なナイフ。

鋭く、丈夫で、また美しい、機能美に満ち溢れた一級品だ。

すると鉄鉱石は、昴の手の中で、まるで生き物のようにぐにぐにと動き出すのだった。

手応え有りだ。

昴が目を開けると、そこには想像した以上の一振りのナイフが産

まれていた。

どうやらこの能力は、素人が想像しきれない細部に関して、自動的に埋めてくれるようだった。波打つ波紋に、光を跳ね返す金属光沢が眩くて、ずっしりと感じる重みがまた心地よい。

そうして眺めていると、今度は昴の脳内に、新たな情報が流れてきた。

武器：鉄のナイフ

レア度：

特殊付加項目：中に入った磁石により、常に剣先が北の方向を指そうとする

付属効果：切れ味＋１、強度＋１

それは生まれたばかりのナイフの情報だった。

何故か理由はわからないが、付属効果というものが付いている。

念じた時に鋭さと丈夫さを望んだ結果だろうか。

試しに昴は、ナイフを持ち大木に斬りつけてみた。

すると　サクツ、という感触と共に、大した力も込めてない

のに刃先から２センチ近くも木に埋まったのだった。

「おお、すっげ……」

昴は驚きの声を上げた。

きつと切れ味＋１の効果なのだろう。

しかしこれで＋１ならば、それ以上になるといったいどれほどになるというのか。

いずれは鉄でも楽々切れそうだ。

昴はこの力の潜在能力に、心が浮き立つ。

そして集めた品で、次々と道具を作っていく。

武器：木の棒

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：強度+2、疲労回復+1

防具：木製の鞆付きベルト

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：酸化防止+3

防具：土の手袋

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：耐水属性+2、強度+2

以上が残りを使った武具である。

しかしオーランドールの幹を使い、山道を動きやすいようにと考えて杖にしたら、なんと疲労回復+1といううってつけの物が出来上がったのは僥倖だった。

まだまだ知らないことが多いな。と昴は思う。

しかしこれから知っていけばいいことだ。

こちらに來た時の姿は、パーカーにジーンズ、そして何故か運動シューズを履いていたため、これで簡易ではあるがある程度装備を整えることができた。

昂は作った装備を全て身につけると、ナイフを手のひらに乗せる。するとそれはくるくると回り、やがて勢いを失くしピタリと止まった。

情報によると剣先の方が北らしい。

昂はそれを何度も繰り返し返し方向が間違っていないことを確認すると、南に向かって歩き出す。

これからどんな出会いがあるのか、それはまだ知る由もないことであつた。

## （昂）

### 装備品

武器：鉄のナイフ

レア度：

特殊付加項目：中に入った磁石により、常に剣先が北の方向を指そうとする

付属効果：切れ味＋１、強度＋１

武器：木の棒

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：強度＋２、疲労回復＋１

防具：木製の鞆付きベルト

レア度：

特殊付加項目：なし

付属効果：酸化防止+3

防具：土の手袋

レア度：

特殊付加項目：なし

付属効果：耐水属性+2、強度+2

## 02話 初遭遇

昴は苔でぬかるむ森の中を、慎重に慎重に歩いて行った。

野生動物がいるかも知れないので歌を歌いながら威嚇をし、途中で見つけた果実で喉を潤し腹を満たし、一歩ずつ一歩ずつ確かめるように歩いて行く。

それは想像以上に体力を要し、時間もかかる作業だった。

そうして係ること約半日、昴はとうとう、森を突破することに成功した。

昴にとってこれほど長時間の歩きっぱなしは久しぶりだった。しかし杖に付加された“疲労回復+1”の恩恵もあるのだろうか、疲れは目立つがまだ体は十分動く。

ところが一難去ってまた一難、今度は新たな問題が浮上した。

昴は森を抜けた感動に浸る間もなく、杖に体重を預け、辺りを見回した。

前方に広がるのは緑豊かな丘陵と、その合間を縫うように踏み固められた道である。

紙に書かれていたとおり、確かに道に出たようだ。

しかし日が沈みかけていたのである。

（あっちゃー……）

まずい、と昴は思った。

野宿はまずい、絶対にまずい。

何故なら取れる暖がない。

獣を遠ざけ、体を冷えさせないために焚き火は必須だ。

しかし周りは森ということで薪はいくらでも手に入るが、ライターのような文明の利器など持っていないはずもない。

昂は小さく舌打ちする。

（どうする？ あの木を擦って火をつけるヤツ、やってみるか？ いや、でもあれってそんな簡単じゃなかったよな。そのための道具も今から作らなきゃいけないし）

それに火がつく保証などない。

もしかしたら無駄な労力に終わるかもしれない。

そう考えると、どうしても二の足を踏んでしまう。

昂は大きく息を吐き、どうしたもんかと頭をポリポリと搔く。

そうして熟考の末、考えを決めた。

（仕方ねえか。こうなりや歩けるところまで歩いて、今日は寝ずの晩だ）

それはある種、無謀とも言える決心だった。

暗い屋外に一人で気を張り続けること、その過酷さを昂は知らなかった。

いや、薄々気づいていながら、どこか楽観的に考えていた。

まさか死ぬことはないだろう。である。

疲労が溜まっている今では、十中八九、途中で寝落ちることになる。

そして待つのは、ここを縄張りにする野生動物の群れの牙だ。

まず助からない。

そんな選択である。

しかし今回、この選択は偶然にも良い方に働いた。

昂が西日に照らされながら歩いて行くと、遠くに何やら煙らしきものが見えたのだ。

火のないところに煙は立たぬ。転じて煙があればそこには火があることになる。

「おお！ ラッキー！」

昴は自分の強運に感謝しながら、駆け足でその火元へ向かっていた。

昼の世界は終わり完全に夜の帳が降りた頃、昴はその火の側まで来ていた。

遠くから見ていた限り、その火の発生源は人里によるものでなく、同じく放浪者による焚き火のようであった。

そしてそれは的中した。

そこには、石で囲み薪を積んだ火にあたる、一人の男が座っていた。

昴は多少遠くから手を振り、フレンドリーに話しかける。

「すんませ〜ん」

声に反応してその男が振り向いた。

その瞬間、昴は足を止める。

そして絶句した。

あまりの突然のことに、必要以上に凝視してしまう。

なんとその男、人間ではなかった。

突き出た鼻に、頬のない口。全身を覆ったロープの先から見える手には、指の根元まで毛が生えている。

ターバンを被っているので確かではないが、きっと耳は頭の上にあるだろう。

（これって、獣人って奴……？）



モデルは犬か狼か。

ファンタジーでは定番であるが、初めてその姿を見ると、その異質さに圧倒される昴だった。

引き締まった体をしており無駄な贅肉は少しもなく、身長もかなりある、180はゆうに超えているだろう。

年齢はパツと見、定かではない。

20そこそこのような気もするし、50を超えているのかもしれないかった。

寿命の差とかもあるのかもしれない。

「なんだ？」

獣人の声は低く渋かった。

昴は慌てて反応する。

「あつ、いや。その、焚き火に俺も同伴していいのかな。と思いまして」

その言葉に獣人は目を細めた。

「一人か？」

「はい」

「荷物はどうした？ まさか手ぶらというわけではあるまい」

「いや、それは……」

昴は口ごもった。

まさかないです、とは言えなかった。

そもそも今の状況が不自然過ぎるのだ。

説明なんてしょうがない。

昴がどう答えたもんかと迷っていると、獣人が助け舟を出してき  
た。

「もしかして、野党にでも襲われたのか？」

「えっ？ あっ、まあ、そんなもんですかね。ハハッ」

昴がごまかすように笑って返すと、獣人は不振に思ったのか、目  
を鋭くする。

失敗だった。

昴は、咄嗟に嘘をつく。

「その、実は俺、記憶がないんですよ」

これなら全てを誤魔化せる。

ただし信じてもらえる可能性は非常に低い。

案の定、獣人は眉を寄せる。

そこで昴は、言葉でたたみかけた。

「覚えているのは自分の名前だけなんです。それで目が覚めたらい  
きなり知らない森にいて、そこでどうにかしてやっとここまで辿り  
着いたんです。ホントはこのまま野宿かな、と思っていたんですけ  
ど、運の良いことにあなたが焚き火をしてくれていて……」

ほとんど本当のことである。

しかしいくら言葉を重ねても、獣人の反応は鈍い。

どうやらこれっぽっちも信用してくれていないようだ。

とはいえそれも当たり前だろう。

普通、怪しむに決まっている。

しかしそれでは困るのだ。

昴は深く頭を下げた。

「ご一緒させて頂きたいんです。お願いします」

昂にできる精一杯の誠意だった。

獣人が口を開く。

「記憶喪失というやつか……」

その言葉を聞き、昂はぱつと顔を上げた。

もしかして納得はしないにせよ、“そういうこと”にしてもらえるのかと思ったのだ。

しかし見えた獣人の表情は、どこか呆れている様だった。

「でもな、どんな事情があれ、旅つてのは基本的に自己責任だ。はつきり言つて俺が君を助ける義理はない」

返ってきたのは拒絶の言葉。

しかしそれは正論だった。昂には一分一厘、反論の余地はない。昂はがくりと肩を落とし、呟いた。

「確かに、その通りっすね」

薄情だとは思うが、そう言つてどうにかなるものでもない。

残念だが断られたのだ。

昂は体を起こし、踵を返す。

仕方ない。当初の予定通り、どこかで寝ずに夜を越そう。

その時、後ろから声がかかった。

「まあ待て。そう結論を急ぐな」

昴は振り返る。

獣人はふん、と鼻を鳴らした。

「困ったときはお互い様ともいうからな。まあ離れて暖に当たるくらいならいいだろう。しかし」

獣人はそこで言葉を止め、置いてあつた自分の荷物を引き寄せる。そうしてぱんぱんに詰まったりユックから、弩を取り出した。

「ここらには野党の根城があるという。そしてもしかしたら君は、その斥候なのではないかと俺は考えている」

獣人は射ぬくような瞳で昴を見つめる。

「君が俺に害をなそうとしたら、問答無用でその額を撃ちぬくつもりだ。それでもいいか？」

警告だった。

てんでの外れであるが、どうやら相当警戒されているらしい。しかしその迫力は本物で、きつとこの人は過去に人を殺したことがあるのだろう、と昴は思った。

「わかりました」

昴はゆっくりと頷いた。

どのみち選択肢などありはしない。

寝ずの番よりは、多少警戒されていても、ゆっくり寝れる方がいいに決まっている。

それに逆に考えれば、これは安心にも繋がる。

これまでの対応から考えるに、この獣人は旅になれているに違い

ない。

そういう人と一緒に入られるのは、この状況では頼もしくある。野犬などに食い殺される心配は、これでなくなったと言えるのだから。

そうして昴は火に当たる獣人の向かい側、そこから少し離れた場所に陣取った。

当然下に引くものなど何も無いので、土をベッドに腕を枕に横になる。

『武具生成能力』は今この瞬間には役に立たない。“毛布”などは防具として適用されないし、大きめの服をつくろうと考えても、それだけの素材が一つもないからだ。

昴はごろりと仰向けに転がった。

空には満天の星空が広がっている。

しかしやはりここは地球ではないようで、知っている星座は一つもないし、月も赤く染まっている。

昴は目を瞑る。

パチパチと鳴る焚き火の音は心地よく、土の地面は意外に柔らかい。

昴が夢の世界へと旅するのに、そう時間はかからなかった。

意外に疲れていたのだろうか。昴が目を覚めたのは、すでに日が昇りきった後だった。

昴は目をこすりながら体を起こす。

すると体の節々が少し軋んだ。

「ふわあ」

昴は大きなあくびをしながら、背伸びをする。

「お早う」

すると横から声がかかった。

「あつ、お早うさんです」

獣人は火の上に鍋を置き、ぐつぐつと何か煮込んでいた。  
昴はくんくんと鼻を鳴らす。

そういえば先程から何か良い匂いがしている。

「一杯食うか？ 体が温まるぞ」

「えっ、いいんですか？」

「ああ」

獣人はそういうと、荷物の中からくたびれたお椀を出し、鍋の中のスープをそそいだ。

そうして近寄るように、手招きをする。

昴がお椀を受け取る時だった。

「俺の名前はガルムだ。放浪の薬剤師をやっている」

自己紹介された。

「あつ、俺、昴（すばる）って言います。職業は、わかりません」  
「そうか」

簡潔なやり取りだったが、それだけでどこか距離が縮まった気がした。

少なくとも警戒心はある程度薄れているようだった。

そうしてお互い何も語らぬまま、黙々とスープを口に運ぶ。

野菜だけしか入っておらず、しかも独特の匂いを発するスープだが、それはとても美味しかった。

久しぶりの温かい食事は、体だけでなく心の奥まで響いてくるようである。

「まだいるか？」

「あつ、はい」

まだまだ何杯もいける昴は、ペコリと頭を下げて受け取った。  
ガルムは苦笑した。

「ところでスバル。お前はこれからどうするんだ？」

「えっ、これからですか？」

昴はスープを飲むのを止め、考えた。  
しかし特に目的らしい目的はない。

「うーん、とにかくどこかの町には行こうと思っているんですがね。ほら、職を見つけないと。あつ、そういえばここから一番近い町ってどこですか？」

するとガルムは眉を寄せた。

どうやら呆れられたようだった。

そして大きなため息の吐いた後、やれやれといった口調で話してくる。

「俺はこれから、仕事を頼まれている村にいくつもりだ。距離はここから約十三里。一日でいけない距離じゃない場所にある」

ガルムが指さす方向は、昨日進んでいた方向だった。  
これからは道が狭まり、隘路になっている。

「どうする？ お前もついてくるか？」

「えっ、いいんすか！？」

「まあ、ここで放り出すわけにもいかないからな。それに一日一緒に  
入れば分かるさ、お前は悪い人間でないことぐらいはな」

昂にとって、願ってもない提案である。

昂は何度も頷いた。

「行くっ、俺行きます。あざっす、本当に助かります」

満面の笑みで喜ぶ昂に対し、ガルムはニヒルに笑った。

「まあ、多少荷物は持ってもらうことになるぞ」

「はい。そんなに大丈夫です」

「そうか」

火の片付けをし、一行は出発することにした。

昂の担当分として受け取った荷物は、見た目はガルムの三分の一  
以下だが、信じられないくらい重かった。

「ちよっ、きつつ……」

ガルムはため息を付く。

「ふう、見た目通り軟弱なやつだな」

結局、荷物の幾つかを受け持ってもらうことになった



しかし信じられないことに、ガルムはあの量の荷物を、大して苦にしていなかった。

きっと体のスペックが違うのだろう。

昂はそう考え、自身を納得させる。

「遅れるなよ」

空は拓け、朝日は昇る。

荷物はまだまだ重かったが、弱音は吐くまいと歯を食いしばり、昂はガルムの後についていくのだった。

### 03話 山間の村

それからどれほど歩いただろう。

肩掛けの袋の紐が肉に食い込み、膝の裏に鈍痛を覚えた頃、昂はとうとう村にたどり着いた。

昂はほっと一息つき、抱えていた荷物を下ろす。

そこは山の麓を開拓した、小さな村だった。

木造の家が寄せ合うように建ち並び、周囲には猛獣避けの木の柵がしっかりと埋められている。森の幸が豊かそうな反面、その被害も大きそうだ。

「すぐに村長のところに行くぞ、付いて来い」

ガルムは親指で村の奥の方を指さした。

後ひと踏ん張り、昂は気合を入れ直し、再び荷物を担いだ。

村の中は夕食時のせいか人氣が少なく、どの家も中から煙が立ち上っていた。

しかし外に出て何やら作業をしている人もいて、こちらを見てはぺこりと頭を下げてくる。

ちなみにいるのは全員、人間であった。

ガルムのような獣人は、もしかしたら数が少ないのかもしれないと昂は思った。

そんなガルムは手馴れたように、その一人一人に会釈をしながら、何でもないように進んでいく。

昂も真似をして後についていった。

そして村の奥、一際大きい二階建ての家に、二人はたどり着いた。その家は他のものと違い、門のところに大きなドアノックが付い

ており、かなり豪勢な作りだった。

これが村長の家だろうと、昂は一目で理解する。

ガルムは遠慮なく、ドアノックをがんと鳴らした。

すると中の方からバタバタという足音が聞こえ、扉の前まで来た  
と思うと、ゆっくりと扉が開いていった。

「どちら様ですかいな？」

そうして顔を出したのは、スス汚れた格好の、人のよさそうなお  
ばちゃんだった。

「よっ、マドレーヌさん。来たぜ」

ガルムは片手を上げ、ぶっきらぼうに答えた。

どうやら顔見知りのようである。

マドレーヌは、笑顔になった。

「あらあらガルムさんじゃないかい、いらっしやいな。ほんま助か  
るわ、毎度毎度ありがとうねえ。お父さんお父さん、ガルムさんが  
来ましたよー」

マドレーヌが声を上げながら奥に戻っていく。

すると今度は、代わりに屈強な男性が現れた。

髪に白髪の混ざった中年で、顔に動物に熊の爪で引っかかれたよ  
うな傷跡が残っている、いかつい男だ。

「おお、ガルムさん、よう来たよう来た！ 歓迎するぞ」

男はガルムを抱擁すると、その背中をバンバンと叩く。

「おいおい、痛えよ村長さん」

「はっはっ、嘘言っなや。なまっちょらんのは、見りゃわかるわい」

この大男は村長のようだった。

村長と昴の目が合う。

村長はにやりと笑った。

「坊主はもしかしてお弟子さんかい？　よう来たよう来た。お疲れじゃろう」

昴はすぐに否定しようとしたが、村長はそれより早く昴を抱擁すると、ガラムと同じくバシバシと背中を叩いた。

ガラムはずれたターバンの位置を戻しながら、口を出す。

「勘違いせんでくれ、俺とこの坊主とはたまたま途中で一緒になっただけだ。色々と困っていたようなんで、一応ここまで連れてきた」  
「ほう、そうじゃったんかい。ガラムさんは優しいのう」

村長は昴に向き直る。

「まあ客人には変わりないわ。お前さんも気兼ねせずくつろぐと良か」

村長は顔は昴の肩をポンポンと叩く。

見た目は怖いが、度量のある人物だと昴は思った。

「すみません。お世話になります」

昴はペコリと頭を下げる。

村長はうんうんと嬉しそうに頷く。

「ところで病人はいないのかい？ 早速診ようと思うが……」

ガルムの言葉に、村長ははつと顔を上げた。

「ああ、そいじゃった！ ガルムさん、早速で悪いが、いつちよ診てあげてくれんかね。鍛冶屋のトラさん一家が、ここんとこずーつと寝転んじよるんじゃ！」

「おおう、そりやまずい。じゃあすぐ行こう」

ガルムは昴の方を向くと

「スバルは先に村長さんどこにお邪魔しときな」

と言った。

昴は「俺もついて行きますよ」と言おうとしたが、思いとどまった。

ろくな知識のない奴が付いても邪魔になるだけだ。ならば素直に甘えておくべきだろう。

昴が頷いて返事すると、ガルムは背負っていたリュックを下ろし、中から医療道具らしき小さな鞆を取り出した。

「じゃあ行こうか」

「おう。坊主は気兼ねなく中でくつろいどいでくれ」

そうして二人は振り返ることもせず、早足で治療に向かって行った。

昴はその後姿を見送ったあと、荷物を持って中に入った。奥の方で、にこにここと笑い手招きしているマドレーヌの姿が見える。

「荷物は適当に置いときんしゃい。それよりご飯食べんかね」  
「はい。ありがとうございます」

村長宅で暮らしているのは、村長とその妻マドレーヌ、そして息子夫婦に授かったばかりの孫を含んで、計五名であった。

昂はその家族の団欒に混ざり、この世界の家庭の味というものを堪能した。

食卓に並んでいるものは、山菜のスープに鹿の肉を炙（あぶ）ったもの、そして一切れのパンである。

種類としては少なかったが、肉が山のように盛られていたので、昂には食い切れないほどのボリュームがあった。

山の麓のせいにか少し塩味に欠けている感じはしたが、どれもが結構な美味であり、食生活についてはそれほど心配がいらないうだと、昂は一人満足する。

そうして昂が、いろいろと聞かれる質問に対し、当り障りのないことを答えていると、やがて村長とガルムが帰ってきた。

村長はそのまま上座に座り、ガルムは昂の隣、空いている客席の席を取る。

「父さん、どないやった」

村長の息子が言った。

父親に似て、恰幅の良い青年だ。

「うむ。難しいことはよくわからんが、ガルムさんは大丈夫だといってくれたぞ。処方した薬を飲ませればすぐ治ると」

「ほうか、そりゃ良かった」

ガルムは出された水をぐいっとあおり、口を開く。

「ありや、“トクノプラマ症”っていう原虫感染症だ。おそらく感染していた肉を、ろくに火を通さず食ったんだろ。もうちょっと処置が遅れてりや、脳炎に神経系疾患を併発し、場合によっては死んでいた。結構ぎりぎりなところだったな」

物騒な話だった。

この世界も病気の怖さは変わらないらしい。

「おー、そないな病気があるんか……くわばらくわばら」

「まあだが、もう大丈夫だ。ここらじゃ手に入らない薬草を使うが、治療法は確立されている。2、3日のうちに回復するさ」

そのセリフを聞いた村長は、嘆声を漏らす。

「いんや、ガルムさんは頼りになるわ。ホントいろいろお世話になつちよる、ありがとう」

「気にせんでくれ。好きでやっていることだ」

ガルムはニヒルに答えた。

しかしその内面には、熱いものを持っているようだった。でなければ誰もこんな面倒なことはしないだろう。

“ 医は仁術 ”

しかし言うは易し行ふは難し。

ガルムはその信念をはつきりとした形で実現している、稀有な人物といえた。

食事を終え、村長の好意により酒が出される。つまみには、豆や燻製、果物が存分に振舞われ、テーブルが埋まるほどの量であった。

昂は未成年だが、異世界に日本の法律など関係ない。それに断れる空気でもなく自分も飲みたかったので、喜んでご馳走になった。肴には、村長が村で起こった珍事や祝い事、狩猟の際の話などを面白可笑しく話してくれた。

ガルムも少し酔っているのか、ちよつとだけ饒舌になっていた。この和気藹々とした空気の中、昂は前から考えていた話をきり出すことにした。

「あの、すみません、村長さん」

「ん、なんだい？」

「実は俺、恥ずかしながら一文無しなんですよ。そこでこの村で何か仕事を手伝って、できれば旅費を稼ぎたいんですけど、何か仕事ってあるでしょうか？」

すると村長は笑顔を崩し、少し困ったという表情をした。昂は予想外の反応に、どこか失言だったのか、と慌てる。すると後頭部に、ごっん、と衝撃がはしった。

昂が振り向くと、それはガルムによる拳骨であつた。

「なにすんすかー、ガルムさん」

ガルムは責めるような顔をしている。

「バカか、お前。こういう村では外貨は貴重なんだよ。流通してるのは遠く離れた場所だからなかなか手に入らない、帅气的いざという時のための生命線だ。対価としてだって気安く出せるもんか」

昂は言葉を失った。

そして自分の軽率な発言を恥じた。



「すみませんでした、村長さん」

昂は頭を下げる。

しかし村長は、笑顔で言う。

「いやいや、気にしなさんな。近頃は盗もうとする輩も多いのに、  
そうして働いて稼ごうっちゅう心がけは立派じゃけん」

村長は一杯酒をあおると、言葉を続ける。

「あのー、じゃあスバルさんは何か特技はあるかいの？ 大した金額じゃなが、少しぐらいなら融通利かすわ。さすがに立场上、ただっちゅうわけにはいかんがの」

「えっ、いいんすか……？」

「うん。構わんよ。こっちがいつちゅうとるんじゃけ、気にしなさんな」

昂は村長の優しさに、救われた思いになった。

ほんとうに有難い。

しかし問題は、特技といわれてもピンと来るものがないことだ。  
得意科目の英語は、この場ではまったく意味を成さない。  
となると、あれしかなかった。

「えっと、武器とか防具なら作れます」

昂の発言に、面々は目を丸くした。

どうやら相当、予想外だったらしい。

「スバルさん鍛冶師じゃったんかいな。そりゃありがたい」

村長は立ち上がり、台所の方から穴の開いた鍋を持ってきた。

「丁度良かったわ。トラさんが寝込んだじよって、いろいろと金物が不足しちゃった所なんよ。工房はトラさんをお願いするとして、じやあまず、これ頼もうかの」

しかし昴は顔を硬直させた。

『武具生成能力』で、鍋は作れないのだ。  
能力が適用されるのは、あくまで武具に関してである。

使い方次第で凶器になるからといって、元々の目的が殺傷でない場合、生成不可能。

それは森で事前に実験済みのことだった。

「あつ、鍋はちよつと無理なんですよ……」

昴は心苦しくも断った。

村長はきょとんという顔をする。

「あれつ、無理なん？」

「はい。できるのは武器か防具に関するものだけで……」

村長は少し考え込んだ。

「じゃあ、釘とかはどうかね？」

「あ。それも、ちよつと厳しいですね……」

すると場が静まり返った。

「おいおい、適当なことなら言つなよ」

ガルドが言う。

「いや、ほんと武器ならいけるんですよ。剣とか、槍とか。あつ、弓なんかもたぶん大丈夫です」

しかし説得力は皆無であった。

鍋が直せないのに、武器は打てるといわれても、それは道理に合わないのだ。

村長は困ったという顔をする。

「うーん、申し訳ないけども、鍋が直せんのに武器うちゅうのはね。まあ誠意は伝わったんで、仕事は違うもんをちょっと考えておくとするけんね」

そう言われては、昴がそれ以上返せる言葉はなかった。

さすがにあの異質な能力を、見栄なんかのために披露するわけにはいかない。

しかしできるといった手前、せっかくの好意をつぶしてしまい、昴は恥ずかしさで穴があつたら入りたい思いであつた。

「まあまあ飲もうや。ほれスバルさんも遠慮せず、ぐいぐいきんさい」

村長さんは尚も変わらず優しく接してくれる。

しかしその優しさが、痛くてしょうがない昴である。

（くっはー、何だこの空気。あー、下手にできるとか言っんじやなかった。ってか金の工面もホントどうしよう……）

昴の前途はまだまだ少しも晴れていない。

一寸先は闇、五里霧中の状態はまだまだ続きそうだった。

## 04話 村人たち

村長の家の二階客間にて就寝した昴は、疲れが溜まっていたのだろつか、次の日目を覚ましたのはすでに太陽が中天に差し掛かるうとしている頃であつた。

昴は目を擦り、起き上がる。

そして欠伸をしながら背伸びをして、コリを解す。

部屋を出て、階段を降りると、そこにはスープを煮込むマドレーヌの後ろ姿があつた。

マドレーヌは昴が起きたことに気付いていたようで、こちらの方を見ないまま言う。

「お早うさん。よう寝れたかい？」

「あつ、はい。ぐっすりでした」

マドレーヌは、水を樽の中から一杯、桶に汲んだ。

「ほれ、これで顔洗つてきんしゃい。それと、ちょっと昼には早いけど、ご飯にするかえ？」

昴は桶を受け取り、言う。

「どうも。あつ、ご飯はみんなと食べようと思います」

しかしそれを聞いたマドレーヌはこころろ笑う。

「今日の男衆はみんな、弁当持って山ん中やよ。せつかくお客さんが来とるんやき、いいもん獲ろうとはりきったわ。やけえんな

「こと気にせんでええよ」

昴は驚いた。

そして自分なんかのためにそこまでしてもらえる事を、恐縮に思う。

「そうなんですか。じゃあ、一足早く、ご飯頂きます」

マドレーヌは笑顔で頷いた。

昼食に出されたものは、山菜をふんだんに盛り込んだ肉団子のスープであつた。

出来立ての熱々で、昴は息をふーふーと冷ましながら口に運ぶ。

おいしい。

それはほんとうに美味しかった。

疲れた体の全身にエネルギーが行き渡るようで、五臓六腑に染み渡るとは、まさにこのことだろうと昴は思う。

「ようけあるけえ、好きなだけ食べんしゃい」

「はい」

昴は結局、六杯もおかわりした。

「あー、食った食った」

昴は椅子の上で仰向けになり、腹を押さえる。

向かいではマドレーヌがにこにここと笑顔で座っていた。

昴はそういえば、と思う。

「あの、ガルムさんってどこ行つたんですか」

朝起きたら、二段ベッドの下の方に、ガルの姿はもうなかった。

「ガルさんかい？ ああ、ガルさんは一人で森の中へ薬草の採取だよ。朝早くから精の出ることさ」

「へえ」

昂は納得した。

確かにここらの森は深い。色んな薬草が生えていそつだ。

しかし と昂は思う。

（となると、俺だけ何にもしていなことになるね？ それってやっぱりまずいよな……）

世話になりっぱなしというわけにはいかなかった。

昂は決心をし、ぐいっと身を乗り出す。

「あの、マドレーヌさん。なんか俺にできそうな手伝いとかってあります？」

マドレーヌは一瞬きょとんという表情をした。  
しかしすぐに笑顔に戻ると

「そうじゃねえ。じゃあ水汲みでもお願いしようかね」

昂に仕事を回してくれたのだった。

水汲みというのは単純な作業で、村の中央にある井戸から、掬い、

運んでくるだけだ。

しかしそれは力仕事に分類されるため、昴は自分の仕事だと張り切って外に出た。

外ではすでに日が昇りきり、赤外線が空からガンガン降り注いでいる。

昴は両手に桶を抱え、村の中央へ向かっていく。

村長宅から井戸までは、小さな村のため目に見える距離である。

しかしその景色は昨日来た時のものと違い、村の人たちが表に出ているため、賑やかなものであった。

しかし男衆は狩りに出ているとあって、残っているのは女性と子どもだけのようだ。

昴が場違いな空気を感じながらも前を通ると、やはり珍しいのか周囲が次第にざわつき出した。

「ほら、あの人……」

「ガラムさんの連人（つれびと）やよね。男の人？ えらく細いが」

「でも白い肌やねえ。あまり外に出んのとちやうか？」

「若くて、かつこいいやん。誰か声かけんね」

いくつかの声が耳に入る。

昴としては、こんなに注目を受けた経験がほとんどないため、むず痒く思った。

しかも結構な言われっぷりだ。

昴としては自分がそこまで痩せていると思ったことはないが、確かにここで男の会った人は、全員鍛えられていた。きっと生活様式の差によるものだろうが、男として貧弱に思われるのは忸怩たる思いがある。

そうして村の中央、井戸の前まで昴が来ると、そこにはおばさんらが何人か集まり、まさに井戸端会議の真っ最中であった。

昴は挨拶する。



「こんにちは」

するとおばさんらは会話を止めた。  
そして目を輝かせる。

「あつらー、もしかして噂の客人さんかね？」

「わっかいんやね。それに痩せとる。ちゃんと物食つとるんか」

「いやいや、都会の方じゃと、みんなこんなもんなんとちやうか？  
ほら、野良仕事せんもんじゃけえ、動かん。そんで食わん」

「ありや、そりや羨ましいね。あ。っちゆうことは、兄さん都会から来たんかい？」

昴はズケズケと言い寄られた。

どうやらおばちゃんパワーはどこも変わらないようで、そして昴にはそれをまともにさばける実力は持っていない。

面くらい、どうしていいもんかと、慌てるだけだ。

「あらあら可愛いねえ」

「兄ちゃん兄ちゃん、もう昼は食ったかね？ 食ってないんなら、  
うちで食うか？」

「そりやあかんよ。みんなでここで食おうや」

「あつ、俺、もう食べましたんで……」

「あら、残念。ほいじゃったかい」

「マドレーヌさん料理上手やけんねえ。美味しかったやろ？」

「あつ、はい」

「へえ。こんな田舎料理でも、都会もんの舌に適うんやねえ」

「そりや、こっちは材料が新鮮たい。あっちの方はきつと傷んだのを食つとるんよ。そりやあ味落ちるわ」

「ああ、なるほどねえ」

昴は圧倒され、いつの間にか会話に巻き込まれた。

おかげで井戸の水を汲む暇も作れない。

というか、いつの間にか都会からやってきたことにされているのはどういう事か。

しかも今度は後ろから、興味津々といった、村の若い女の子達がやってくる。

「母ちゃん、うちらもお話してみたいんやけど」

「ありゃ、そうやね。確かにうちらが独占したら悪いっちゃね」

「やね。ほら、じゃああっちでお話してきんしゃい」

「若いもんは若いもん同士やね」

「はっはっ、お兄ちゃん、両手に花どころか、満開の花が咲き乱れとうわ。嬉しかろうが」

「コミル、変なことはせんようにな。アジャツペが知ったら、後で怒りかねんよ」

「はあ、母ちゃん何言つとん。あんな奴うちは知らんよ。あっちが勝手に言い寄ってくるだけじゃ。うちは好きな様にやるわ」

「はははっ、アジャツペのやつフラれたわ」

「あらら、可哀想に」

昴は、もう本人の意志など置いてけぼりで発展する話題に、呆然とすることしかできなかった。

というかアジャツペって誰だ。

後で逆切れとかしてこないだろうな。

昴がそんな心配をしていると、おばちゃんの一人が昴の抱えている桶に気づく。

「あら、もしかして水汲みに来たん？」

その一言で周りも気づく。

「そら悪いことしたね。ほら、さっさと汲みんさい」  
「あらら、ごめんねえ」

おばちゃんたちはやつと昴の前に道を開けた。  
昴は気づいてくれたおばちゃんに感謝した。  
おかげで、やつのことで井戸まで辿り着くことができた。

「でも、あんな細腕で水汲めるんか？」  
「どうなんやろね」  
「男やけん、きっと大丈夫やろ」

しかし後ろでがやがやと、興味はまるで尽きてないようだった。  
昴は気にしない素振りをして、上から吊るされた滑車のロープを  
引くことにする。

「つつぎ！」

それは思いの外、重かった。

「あら、大丈夫かや？」  
「頑張れ頑張れ」

周囲がはやし立てる。  
昴はまるで見世物になった気分である。

「つつぎいい、くつ」

そして何度か水汲みを繰り返し、どうにか桶を満たんにした昴は、

すでに息が上がっていた。

しかもこれから桶を持って帰らなければいけない。

途中に汲むのもあれだけ苦労したである。はっきり言って、一応汲むぶんは汲んだが、持って帰るのは不可能だと思われた。

昴は途方に暮れた。

というよりこの桶、でかいのだ。

昴の胴回りより一回り大きく、そして深い。

それが二杯もある。

昴は、一応と腰をかがめ、桶を持とうと挑戦してみた。  
しかし片方も持ちあげるのも叶わない。

「都会もんはダメやねえ」

そんな昴に呆れてか、おばちゃんの一人が手を貸してくれた。

なんとそのおばちゃん、昴が抱えきれなかったものを、ひょいと軽そうに持ち上げた。

昴は目を点にする。

ありえなかった。いくら野良仕事をしているからといって、男と女でここまで差がつくはずがない。

（もしかしてこの世界の人間って、力持ち？）

よく考えればガルムもあれだけの荷物をひよいひよいと抱えていた。

獣人だからと思っていたが、そうでなく、肉体的なスペックがまるつきり違う可能性が浮上する。

「もう片方は、うちが持とうかね」

「そいじゃかね。うちがやろうと思ったが」

「しかし兄ちゃんも、もう少し体鍛えんやあね」

「でもあまり鍛えすぎると、もう村の男らと変わりやせんくならんか？」

「そうじゃねえ。せつかく白くて綺麗なのに、もったいないねえ」

また昴そつちのけで話が盛り上がる。

しかし、悔しい昴だった。

自信があつたわけではないが、膂力ではつきりと劣っているとわかり、肉体労働で働いても大した手伝いにならないことがわかってしまう。

「兄ちゃん。水はうちらが運んどくけん、気にせずのんびりしや」

「えっ？ いや、そういうわけにも……」

「いいけんいいけん、気にしなさんな」

すると、昴の服がグイッと引つ張られる。

「なあ、兄ちゃん、俺らと遊ぼうやあ」

それは先程まで遠巻きに見ていた、男の子どもたちだった。

「あつ、こら。ダメ！ 兄ちゃんはうちらとお話するんじゃけ」

「そうじゃ、チビどもはあつちで遊んどきい」

今度は若い女性が食ってかかる。

「えー、なんでやあ」

「何でもや。お前らと一緒にいると、それは子守になっちゃうやろが。それじゃ兄ちゃんのんびりできん」

「んなことないわ。なー、兄ちゃん」

話を振られ、昴はどうしたもんかと頭を掻いた。

昴としては、どうにか手伝いをして、せめて多少でも気分よく世話になりたいのだ。

それに金も稼がなくてはいけない。

力で劣るからといって、他の仕事を諦めるわけにはまだいかなかった。

「うーん、何か俺にできることがあるかもしれないから、遊ぶのはちょっとなあ」

すると女の子の一人が笑顔で言う。

「あつ、じゃあ、あつちで裁縫しながらお話せん？」

しかし昴に裁縫の心得などなかった。

「あつ、裁縫はちょっと……」

すると他の女性達が、一斉に彼女を責めだした。

「バカ。裁縫は女の仕事でしょ。男で都会もんの兄ちゃんができるわけないやん」

「うんうん、やよね。できたら変よね」

「ほんと、リジウは考えなしなんやから」

提案してくれた女の子は、涙目になった。

昴は慌てる。

「あつ、じゃあ、何か他の仕事はないかな？」

「えー、他の？ うーん、何があるかねえ」

「えーつと、後は洗濯に料理とかにならん？」  
「やねえ」

子どもたちを置いてけぼりに話す女性陣の、洗濯という言葉に昂は反応した。

料理は無理だが、それくらいならできそうだと思った。  
さすがに洗濯機はないだろうが、洗濯板でごしごし擦るだけならきつとできる。

「じゃあ洗濯を手伝うよ」

昂が言う。

「あつ、でも今日のぶんはもう終わったんよ」

「もうお昼やもんね。ちよっと遅いわ」

「今日は天気いいけんね。一気にみんなでやったんよ」

昂は落胆した。

たしかにもう乾かす時間帯だった。

よく見ると周りには物干し竿に、いろんなモノが干されていた。

するとその時、横から、ハイハイ、と女の子が一人、勢い良く手を挙げた。

「カカウか、なんね」

「ほらっ、みんな大事な仕事を忘れとらんっ？ とってもとっても大事な仕事や」

「え、なんや」

「なんかあつたかいな？」

首を捻るみんなをよそに、その子は頬を押さえ、はにかみながら

言う。

「ほらっ。こ、づ、く、り、があるやんっ！」

すると辺りは、わっと騒がしくなった。

「もー、カカウはなんねー！」

「バツカやん。カカウはそんなことばっかや」

「もう、カカウちゃんってばあ……」

「ほんと、頭おかしいんやから。一度ガルムさんに見てもらえつちや」

「えー、でも大事な仕事やーん。みんなそんな事言って、興味津々なくせに。ってか、こないだコミルがアジャツペと逢引しottaんの知つとるんで」

「ええっ、コミルちゃんが……？」

「えゝ、なんねっ。うち、初めて聞いたんやけど！」

「あ、あれはちゃうわっ。ただ、話があるっち言われて、付いていっただけや。何もない！」

「なゝ、ムキになる所が怪しやる？」

わいわいと勝手に周囲は盛り上がる。

そんな戸惑う鼻に、カカウが寄り添うようにくっついてきた。

「なゝ、兄ちゃん。うち、良さげな場所を知つとるんや。今から二人で行かんか？」

周りにまた燃料が投下されたように火がつく。

「あー、カカウはホンマにもー！ 兄ちゃん困つとるやんっ」  
「んなことないっちゃ。ねえ」



「つてかカカウ、ソラクテが好きじゃったんやなかったん!？」

「んゝ、別にゝ。お兄ちゃんの方が好みや。ほらほら、腕とか細いでゝ、そんで肌もきれいや」

「何しよんの、ホンマにもー」

「カカウちゃんやりすぎやー」

カカウはぐいぐいといろいろなものを昴の腕に押し付けてきた。しかし昴は今の状況でそれを嬉しむ余裕はない。

「ほら、離れろっちゃー!」

「なんや、コミル! どうせ羨ましいんやろ」

「ちゃ、ちゃうわっ! 兄ちゃんが迷惑そうやからやっ」

「兄ちゃんも男や。嬉しいに決まっとるわ!」

「もう、やめなつて、二人とも」

「仲良くしようっちゃゝ……」

昴がそんなに困っていると、後ろから服の裾がぐいぐいと引つ張られた。

振り向くとそこには、いつの間にか戦線離脱していた子どもたちが戻って来ていた。

今度は釣り竿を持っている。

「兄ちゃん、仕事したいんやろ? ほら、釣りも仕事や、これを一緒にやるうやあ」

それは昴にとって、願ってもない提案だった。

「ああつ、いいね。行こう行こうつ」

女の子たちは、言い争いをピタリと止める。

「なんや？」

「釣りか？」

昂はゆつくりとカカウを振り解く。

「つつうわけで、俺、釣りしようと思うから。お話はまた今度ってことで」

しかしカカウは食い下がる。

「じゃあ、私もついて行くわ」

すると他の女の子達も顔を見合わせ、頷いた。

「釣りしながらでもお話できるやんね」

「うんうん。みんなで行こうよ」

「釣りとか久しぶりやね。悪くなか」

それを聞いた子どもたちが声を上げる。

「えゝ、姉ちゃんたちも行くのゝ？」

「あんまり大きな声出すと、魚逃げちゃうやん」

「静かにできんけんね、姉ちゃんら」

「俺、いややゝ」

しかしそんなブーイングを、「ミルは「うるさいっ！」と一喝する。

「姉ちゃんらも馬鹿じゃない。おしゃべりはちよつと離れた所です

るけん、心配せんでよか」

「うんうん。ガキはガキで遊んどりい」

「あつ、お弁当のほうどうする？」

「今から作るの間に合わんわ。燻製肉持って行こうや」

昴をよそに、何故かいろいろと決まってい

森の中に流れる清水。

そこに泳ぐ魚を目当てに、予想外の大所帯で行くことになった昼下がりのことだった。

## 04話 村人たち（後書き）

どうでもいい相関図

コミル      アジャツペ      カカウ      ソラクテ

リジウ      ジャイナ      シノーラ      カルトリ

## 05話　せせらぎの小川

昴は借りた釣竿を持ち、きゃいきゃいはしゃぐ女の子たちに囲まれて、森の少し入ったところにある川に向かっていた。

森の中はまさに樹海という言葉がふさわしく、葉の合間を縫うように降り注ぐ木漏れ日は水面のように輝いて、擦れ合う葉音は波音のように響いている。

先日一人で歩いた森の中は、不安で不安でたまらなかったが、今回のようにみんなで歩く森の中は、同じ森でもまるで別物だ。

こんな場所も悪くない、昴は本心からそう思う。

そして出発から約半刻後、一行は無事に目的の川に辿り着いた。

その川、昴が想像していたよりもだいぶ小さかった。

水深は膝上程度で、流れは穏やか。泳ぐこともままならないほどだ。

しかし反面、水はどこまでも澄んでおり、光を反射し輝いている。その景色を見て、まるで宝石のようだと、昴は思った。

「兄ちゃん。最初は餌にする虫集めやかんな。一緒にやろうやあ」

子どもたち中の一人が、駆け寄ってきた。

しかしそれを、女の子たちが手で制する。

「そんな仕事、自分でやり。うちらは兄ちゃんここで待っとくけん」

どうやら女の子達には、釣りなどおまけのようであった。

しかし昴はそういうわけにはいかなかった。

手伝って役に立ちたいこともあるが、それ以上にこれは、願って

もないサバイバル知識を手に入れるチャンスなのだ。

これからどうなるかわからないため、釣りに関することでも、わずかでもいいから身につけたい。

「いや、俺も虫集めするよ。ごめんけど、話はまた今度で」

昴がそう言つて意志を示す。

すると女の子たちはすぐさま手の平を返した。

「じゃあ、うちも行くわ」

「あつ、じゃあ兄ちゃん。あんな、うち、虫がぎょうさんおる場所知つとるんよ。教えたげようか？」

「あの、うちも……昔よく行つとつた所があるんやけど……」

「うちも行くよっ」

一斉に昴は話しかけられた。

カカウなんかは、腕を掴んで肩に顔をすり寄せてくる始末である。あまりの変わり身の早さに、呆れてよいやら感心してよいやら、モテる、とは違い、物珍しさによるものであるうが、困つてしょうがない昴である。

「兄ちゃん、ナイフ貸してえや」

その時、近くにいた男の子が昴の服を引っ張つてきた。

その子の視線は、昴の腰に下げてあるナイフに向いている。

「んっ、どうしたの？」

「いや、兄ちゃんのナイフ、良ければ貸してもらえんかの。ナイフがあると、作業がはかどるんや」

昴は少し考え込んだ。

「んー、じゃあ怪我に気をつけること。約束できる?」

「当たり前や。ってか、んなもんしょっちゅう使つとるで? 慣れたもんや」

昴は苦笑した。

そして腰の鞘から抜く。

すると蒼い刀身が顕になる。

これはこの世界で最初にもらった素材、グランド産鉄鉱石を使ったものだ。

磁石入りで、手持ちの中で一番レア度が高い一品だ。

「うわっ、すごっ、綺麗や……」

すると、受け取った子どもが感嘆の声を上げた。

「おっ、ホンマや。“祝福”付きやないか。結構な値打ちもんやで、これ」

コミルが言った。

しかしその中、聞きなれない単語に昴は反応する。

「えっ、“祝福”?」

「うん。あっ、もしかして兄ちゃん、祝福知らんの?」

「うん。どういう意味? 良ければ教えてくれない?」

すると子どもを含めその全員が顔を見合わせた。

「祝福を知らん人がおるんやな」

「兄ちゃん、いろいろ変わつとるで。でもカツコイイからそれも良しやけど」

「あつ、もしかして都会では呼び方が違うんじゃないか？」

「なるほど。きつとそうや。祝福しらんで生きてこれるはずなかもんな」

「へえ、都会つてすごかねー」

昂をよそに、また盛り上がり始めるのだった。

しかしそんな中、先程からべったり寄り添っている力カウが、ちょいちょいと肩を叩いてくる。

昂は何かと思つて振り向いた。すると力カウは口の横に手を当て、耳打ちのポーズをとっている。

昂はそつと耳を寄せた。

「あんね、祝福つてのは、武器や防具に付く魔法のことや。その武器、何かちよつとした力がついとらん？ 見た目より軽かったり、切れ味が良かったりとかそういうの。まあそんな単純やなく、わかりづらい効果もあるんやけどな。それを祝福っちゅうんやで」

昂は納得した。

なるほど、おそらく祝福とは、『武具生成能力』で作った時についた特殊付加項目や付属効果のことだろうと。

しかしそれで考えると、一つ疑問が生じる。

昂はそのことを力カウに聞いてみた。

「あのさ、何でわかんのか？ 見た目は普通のナイフだよな。何か特殊な見方でもあるのか？」

「ん？ ああ、兄ちゃんは“魔力”が見えんのんな。ってかもしかして魔力のこともしらんかったりする？」

「魔力？ うゝん、意味はわかるんだけどね……教えてくれる？」



「兄ちゃんてほんと世間知らずやなあ。まあ全然構わんけどな。あんな、魔力つちゅうのは、魔法の才能がない奴には見えん、特殊な力のことや。見える奴には何かこう、透明な歪み？　みたいなものとして見えるらしいわ。まあうちも見えんから安心してな。兄ちゃんも持つてなくても気にすることなかよ。どうせあんなの、突出してなけりや意味無いもんなんじゃけえ」

昂は頷いた。

そしてこの世界の仕組みについて、だいぶわかった気がした。魔力の存在。『武器生成能力』と同じ効果。となると、もしかしたら『魔法』も存在するのかもしれない。

昂は力カウにお礼を言おうと思い、耳打ちしようとする。しかしその時

「ああっ、二人してなにこそそしよんねっ！」

都会の談義で盛り上がっていたコミルが、目ざとく気づいた。

「力カウ。抜け駆けは許さんよ！」

「何や。そっちが勝手に無視しとっただけやんか」

「ちやうわっ。兄ちゃんのことについて、話しとっただけじゃ」

この二人は仲がいいのか悪いのか。

あー言えばこー言う、こー言えば、あー言う。

先程から衝突しっぱなしだ。

「二人とも、喧嘩はやめなよ。俺、早く釣りしたいんだ。それより虫の場所教えてよ」

昂が言うと、二人は互いに顔を背け、口を尖らした。

そして双方が昴の手を持ち、森に向かって引つ張り出す。

「兄ちゃん、虫を取るならやっぱ日陰や。石なんかをひっくり返せばごろごろおるわ。だからこつちや」

「何言うとんね。そんな小虫捕まえてもしょうがなか。もっと大きい捕まえて、大物狙いが妥当やろ。じゃけえ、日向で捕まえるベキや」

また言い合いが始まった。

昴は頭を抱えて、

「あー、今回は初めてなんで、小さな虫の方でお願いしようかな」

すると意見をはねられたカカウの方が不機嫌になる。

「えー、なんでやー」

「当然やろ？ カカウが馬鹿なんじゃ。ほいじゃ兄ちゃん、こつちやで」

上機嫌のコミルをよそに、カカウは不貞腐れ、

「兄ちゃん。さっきうち、いろいろ教えたんじゃけえ、貸一つやよ。今度返してくれるか？」

と呟いた。

昴は「わかったわかった」と頷く。

カカウは、すぐに笑顔になる。

「やった。ホントに約束やよ」

長い黒髪を翻し、屈託の無い笑顔で言うカカウを、ちょっとだけかわいいと昴は思った。

それから釣りを始めた昴だが、結局大半を会話で費やし、成果のほどはゼロであった。

ようするに坊主である。

川辺でしゃべっていると魚が逃げるということは知っていたが、悪意のない女の子たちの付きない興味を、邪魔と切り捨てることは昴に出来なかった。

何の役にも立たなかった。その事実には、昴の肩は重くなるが、顔を上げるともう帰る時間帯だ。

昴は腰を上げ、言う。

「みんな、もう帰ろうか」

すると下流の方で釣りを終え遊んでいた子どもたちは元気よく返事をしてくれて、荷物をまとめて集まってきた。

しかし彼らの腰には、幾匹もの魚が吊るされている。どうやらまともに釣れなかったのは、昴だけらしい。

昴はますます肩を落とした。

「兄ちゃん、初めはそんなもんよ。それにお話しとつたんやけん、普通は無理っちゃ」

コミルがフォローの言葉をかける。

昴は「うん」と頷いた。

カカウが昴の手を引っ張る。

「じゃあ帰ろうや、兄ちゃん。そんでな、今日の夕食なんやけど、うちでごはん食べんか？　うち、手によりをかけて作るで」

しかしコムルが割って入った。

「なーに言つとんの。どうせ母ちゃんが殆ど作るくせに。自分の手柄にするなっちゃ」

「違うわ。ホントにうちが作るんじゃ。コムルと違って日々練習しとんじゃけ」

「アホか。んなもん食べさしたら、兄ちゃん、腹壊しちまうが」

「んなわけあるかい、味音痴。もつうちは母ちゃんにも負けんのんじゃ」

「馬鹿言つな。下手な嘘つくと、後々で自分の首を締めるで？」

言い争いは止まらない。

昴はどうしたもんかと頭を押さえた。

するとその時、女の子の一人が、何かに気づいたようでオロオロしだす。

「ん？　どうかした？」

昴が聞くと、女の子は恐る恐る口に出した。

「あの、カズミール君が見当たらん……」

「カズミール君？」

すると子どもたちも騒ぎ出した。

「あれ、ホントやあ」

「カズ君おらんね」

「途中まで一緒に釣りやつとったよね？ どこいったんじゃあ？」

騒がしくなる空気に、コミルとカカウも言い争いを止めた。

「ん？ どないしたん？」

「いや、カズミールって子がないんだってさ」

昴は名前を顔が一致しない。

しかしもちろん村の皆はわかるようだ。

「あの、カズミール君って？」

昴が聞くと、カカウが答えた。

「カズミールってあれや、兄ちゃんがナイフを貸した子や」

「ああ、あの」

やんちゃ、という言葉が似合いそうな男の子である。

そういえばまだナイフは返してもらってない。

「もしかして、溺れたってことは……」

「いやいや、カズミールは泳ぎが達者や。そんなことあり得んわ」

「じゃあ、先に帰ったのかな？ それならいいけど」

「んー、どうやらねえ」

どうすべきか皆が迷っている中、子どもの一人が恐る恐る口を開く。

「あの、実はな……」

みんながその子に視線を向けた。

「あの、実はな……カズ君、たぶん森へ入っていったんやと思う……」

コミルが眉を寄せた。

「どういうこっちゃ？」

「あ、あのな、カズ君ナイフ貸してもらったやろ？ それでな、それがぎょうさん切れるんで、カズ君、俺を誘ったんや。森の奥まで行ってみんか、って」

みんなが言葉を失った。

「俺は断ったんやけど、たぶんカズ君そのまま一人で……」

男の子は涙声になっていた。

カカウは、激怒する。

「バカが！ ナイフ一本で奥まで行くとか、正気の沙汰じゃないっちゃ。弓と剣持った大人が集団で行っても危ないところなんやで！」  
「わ、わかつとるよ。でも、カズ君、聞きやせんもん……」

コミルとカカウは顔を合わせ、頷いた。

「すぐに村に戻る。きっとこの時間なら、お父さんたち帰ってきてるよ。日が暮れるまでに搜索せにや」

「やね、急いだほうがよか」

そんな中、昴は口を押さえていた。

胸中では後悔が押し寄せる。

（きつとナイフを持つて気が大きくなったんだ。バカが、なんでもんな子どもに気軽に貸しちまったんだよ、俺……最低でも見張つくべきだった……）

この中では昴が一番年長だ。

森の事は詳しくないが、だからといって保護者としての役割は果たさなくていい道理はない。

昴に、責任という言葉が重くのしかかる。

「あの、みんな、聞いてくれ……」

昴は考えた末、ゆっくりと口を開いた。

「俺、ちょっとここからカズミール君を探してみるよ。大人の人が出るからって、村の方からだと遠回りだし、もしかしたらこっちの方に帰ろうとしているかもしれないから……」

コミルは目を見開いた。

「バ、バカ言っちゃいかんよ、兄ちゃん。兄ちゃんは知らんのんや、森の怖さを。都会育ちの兄ちゃんが、いや、例え村長でも、素手で行ける場所じゃないで！」

そして皆、異口同音に引きとめようとする。

しかし昴の腹は決まっていた。

もしここで村に帰っても、はつきりいつてまともに食事さえ適わないだろう。

一匹も釣れない坊主のうえ、子どもの世話もまともにできない。

そんな自分が情けない。

せめて失態の責任くらい取らなければ、村人の世話になるわけにはいかないのだ。

「大丈夫、武器ならあるよ」

昴はそう言つて、しゃがみ、手のひら大の石を拾つた。  
そして情報を読み取る。

素材：平凡な石

レア度：

特殊付加項目：なし

そしてすぐさま武器に変える。

イメージするのは、小さなサバイバルナイフである。

小さな石は、ぐねぐねと姿を変えていった。

武器：石のナイフ

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：なし

即席のものだが、これでも説得力は出るだろう。

昴は、みんなにナイフを見せた。

「ほら、小さいけど、一応もう一個持ってたんだ」



みんなが狐につままれたような顔をする。

「あれ？　今、石を拾わんかった？」

「うちもそう見えたけど……」

「ずーっと持ったの？　全然気づかんかったわ」

昴は笑顔を見せた。

「ね、これでいいだろ？　まあもちろん、危ないと思ったら引き返すよ。土地勘もないし、もう日が暮れそうだしね」

しかし皆、どうしようかとまだ迷っているようだ。

それで昴は、あえて皆を急かす。

「ほら、早く戻って、村の皆に連絡しといてよ。今は時間が惜しいんだから」

するとコミルは覚悟を決めたようで、顔を上げた。

「わかった。でも兄ちゃん、絶対無理せんと言ってよ。奥には凶暴な魔物もおおるんやけえね」

「おう、魔物ね。わかった、絶対無理はしないよ」

「よし、約束やけんね。じゃあみんな、行くよ。はぐれんようにね」

そうして昴を置いて、皆は帰りだす。

そんな中、カカウは心配そうに何度も振り返ってくる。

「兄ちゃん、ご飯作っとくけえねえ。絶対に食べてやあ」

カカウのお願いに、昴は手を振り答えたのだった。

そうして昴は、皆を見届けた後、森の方へ向かっていく。  
樹の幹にナイフで傷を付け、迷わないように慎重を喫す。  
しかし一人になってみると、今まで見ていた森が、急に大きく、  
不気味なものに感じられた。

昴は大きく深呼吸し、一歩ずつ森の奥へと侵入していった。

## 06話 キノラッカン

響き渡る、鳥の鳴き声。風になびき、さざなみのように揺れる葉っぱの音。

昴は一人、黄昏前の森の中を進んでいった。

腰には即席のナイフをぶら下げて、そこらにあった石から、もうちよつとだけ上等な剣を一本、護身用に生成するのを忘れない。

武器：石の剣

レア度：

特殊付加効果：なし

付属効果：なし

昴は、片っ端から木を斬りつけ、迷わないように印を残す。

もし、こちらが迷子になったら、ミイラ取りがミイラになる。

万が一そうなって、これ以上村人に余計な世話を焼かせるわけにはいかない。それだけは絶対に駄目だ。

そしてまた、“魔物”の存在が脳裏にチラつく。

動物とは違う、もっと禍々しく獰猛な言葉の雰囲気。

一体どれほどのものなのか。

こんな装備で、立ち向かえるのか。

出会わなければよいのだが。

銃があれば話は別なのだが、あんなものの火薬がなければただのオブリエに過ぎない。

昴の不安の種は尽きなかった。

「カズミール！　いないかー！　いたら返事してくれー！　村に帰るぞー！」

昴は、あえて自分の存在を知らしめるよう、声を出し進んでいく。自分から声を出すのは躊躇われるが、熊よけには鈴や会話がいと聞く。ならばそれに習うべきだろう。

太陽はすでに、その色を鈍いオレンジ色へと変化しそうになっている。

残された時間はわずかであった。

（さっさと見つかってくれ……安心させてくれ……）

森の深みへ立ち入るほど、苛立ちにも似た焦燥感が、昴の中で大きくなっていく。

本当は見つからないことにして、さっさと逃げ出したい気分だが、それはやってはいけないことだと、必死に自分の感情を押し殺す。

もしカズミールが迷っているのなら、同じか、それ以上に不安に違いない。

それならば助けなくては。

それが今の昴の原動力だ。

それから昴は、枝をかき分け、木の根を踏みつけ、声を上げて進んでいった。

しかし、いくら奥へ進んでも、一向にカズミールの反応はない。

声は遠くまで響いているはずだ。

ということはこの近くには、いないだろうか。

それとも一人、さっさと村へ帰ったのかもしれない。

答えはでない。

ならばもう百歩だけ。

そう決めて、足を踏み出したその時だ。

「に……ん……こつ……」

昴の耳が、わずかな音を聞きつけた。  
それはまさしく人間の声だった。

「カズミール！ カズミールかー！？」

こんな森では、それ以外考えられない。  
昴は耳を澄まし、声を張り上げ、さらに奥へと進んで行く。  
すると次第に、声のはつきりと聞こえてくる。

「兄ちゃん……！ どーこー……！？」

嗚咽の混じった甲高い声。

間違いない、カズミールだ。

よかった、見つかった。本当に良かった。

昴は安堵した。

どうやら本気で迷子になっていたようだ。

昴は早足で向かっていく。

「ああ、カズミール。馬鹿野郎」

「うあ、兄ちゃん」

見つけたカズミールはぐずぐずに泣いていた・

昴はカズミールを抱きかかえる。

するとカズミールは、昴の腕の中でより一層わんわんと泣いた。

カズミールはどこかでコケたのか、膝を擦りむいており、血を流している。さらには服にはひつつき虫が散乱しており、ところどころ破けていた。

しかし大きな怪我は見られなかった。  
昂はほっと一安心する。

「ばっかやろう、心配させやがって……。でも、もう大丈夫だからな。さ、家まで帰ろっか」

「うん。兄ちゃん、ごべんな。ありがとー、ひっく」

カズミールは泣いちゃあまずいと思っているのか、必死に泣き止もうと努力をしている。赤くなった目や鼻をこすり、垂れ流す粘膜を袖で拭っている。

昂はそんなカズミールの背中をぽんぽんと叩き、落ち着くよう促した。

するとカズミールは安心するのか、嗚咽が小さくなっていく。

昂はもう怒る気にもなれず、来た道を引き返そうと歩き出した。

「ほんと、心配かけやがって……」

来る時に絶対に迷わないようにと、樹の幹に片っ端から剣で傷を付けて来ていたため、帰り道の心配はない。

（任務、完了……）

昂は心の中で、自分の勇気を賞賛した。

「キッ、キッ、キッ、キッ！」

「キエー、ケッケッ！」

その時のことだ、遠くから何か、猿の鳴き声のようなものが響いてくる。

それに反応するように、腕の中のカズミールが硬直した。

「ん、どうした？」

昴が覗くと、カズミールはまた、泣きそうな顔になっていた。

「まずい、これ、“キノラツカン”の泣き声や……」

「キノラツカン？」

「魔物やあ。ちっちゃいけど、多いからヤバイんや。もしかしたら、俺らのこと狙つとるのかもしれない……」

「はっ、マ、マジ？」

昴はいきなりの事に、足を止め辺りを見回した。

声に反響してか、木の葉がざわざわと揺れている。

もう夕暮れは近い。

「あのさ、走って逃げるべきだと思う？ それとも物音を立てないで、どっかに隠れるべきだと思う？」

「えっと、キノラツカンは鼻がいいって聞いとるけん、多分隠れても無駄やと思う……」

昴はこくりと頷いた。

「よし、じゃあ走るから、しっかり掴まってるよ」

声の出所は、森の奥からだ。来た道の方ではない。村まで逃げ切れば、どうにかなる。

昴は速度を優先して、持っていた剣を放り捨てる。

そのため武器は、腰に携えている出来の悪い、一本のナイフになった。

「あつ、そういえば、俺の貸したナイフは？」

「あの、ごめん……俺、それ落としたら崖じゃって。回り道して拾おうと思ったんやけど、わからんくなつて……それっきりや……」

昴はカズミールが迷った理由を理解した。

そして、やはり俺のせいだったのだと、反省する。

「しょうがない、しょうがない」

昴はカズミールの背中を叩く。

そして足元に気をつけ、走りだした。

昴は、丁寧に森の中を疾駆する。

カズミールの分どうしても重くなり、腕が振れないため、走りにくい。

しかしカズミールに「お前も走れ」なんて言うわけにはいかなかった。

カズミールは彷徨い続けて疲れている。それにまだ小さい。およそ、6、7歳というところだ。

だから俺が走るしかない。

昴は集中した。

限界まで早く、だけど転けないように気をつけて、一步一步を確かめるように。

「キー、キツキツ、キー」

「カー、キャイ、キャイ、キャイ」

昴は川の方へとひた走る。

しかし不穏なことに、後ろから聞こえる鳴き声が、だんだんと大きくなつてきているようだった。

昴は不安になった。



（まさか、俺たちを狙うなんてことはないよな？ 結構距離あるんだし、いちいち追いかけるなんて、そんな面倒なこと……）

その時だった。

昴の上方で、ザザッ、と葉の擦れる音がする。

「あっ！」

カシミールが叫んだ。

昴は、足元に必死だったため、反応が遅れる。

慌てて上を見てみると、そこには黄色い毛むくじゃらの何か、ものすごい勢いで迫ってきていた。

「ウツキヤー！」

その毛むくじゃらの何かは、甲高い鳴き声をあげ、昴の背中に当たってくる。

ゴスンッ

鈍い音が辺りに響き、昴は衝撃にバランスを崩した。

「うぐっ」

昴の肺から、空気が溢れる。

しかし意識は鮮明だった。

駄目だ、持ち直せない……。

咄嗟に判断した昴は、咄嗟に体を捻ることで、背中から地面に落ちる。

ここは深い森の中。地面は木の根が出っ張っているため、凹凸が激しい。そのため、柔らかい土の上とは違い、昴は何度もしたたかに背中を打ちつけることになった。

「兄ちゃん、大丈夫!？」

カズミールは放り出された先で叫んだ。  
見たところ痛がつている様子はない。  
怪我はしてないようだ。

「ああ、一応。ってか何だ？」

昴は上体を起こし、ぶつかってきた何かの方を見る。  
するとそこには、一匹の猿がいた。いや、小さいゴリラというほうが適切か。

全身を黄色い毛で覆い、丸い胴体にゴリラの顔がくっついて、左右から長い手足が伸びている。  
虫みたいで気持ち悪い。  
それが昴の第一印象だった。

「キ、キノラツカン……」

カズミールが呟いた。

「えっ、これが？」

目の前のキノラツカンが、吠えた。

「キツ、キツ、キーーーー!」

それは先程まで遠くから聞こえていたものと、同じ鳴き声だった。

「えっ、マ、マジ……!？」

昴は言葉を失った。

なぜここにいるんだ。まだ距離はあったはずだ。

（尖兵？ いや、考えても無駄だ。でも一匹なら、まだいける）

昴は、考えることを一先ず脇に置き、逃げようと足に力を込めることにした。

しかしその時、真上から一斉に、けたたましい程の鳴き声が発生する。

「ウキヤー、キヤッ、キヤッ

「キー、キヤッ、キヤッ」

「キヤウキヤウ、キキキッ」

昴は上を見た。

するとそこには、何匹ものキノラツカンが、木の枝にぶら下がってこちらを眺めている姿があった。

キノラツカン達は、手でウホウホと自身の体を叩き、むき出しの歯を見せ、楽しそうに笑っている。

それを見た昴は愕然とした。

（なんで、こんなに……）

十では利かない数である。

さっきまではだいぶ後方にいたはずなのに、もうここにいる。

昴には意味がわからなかった。

ここまで気付かれずに、どうやって接近してきたのだろうか。  
レポートでもして来たとも言っのだろうか。

すると昴の耳が、先ほどと同じく、遠くからのキノラツカンの鳴き声を捉える。

それは距離は縮まっているが、今さっきまで聞いていた鳴き声に違いない。

昴はますます混乱した。

どうということだ？　今ここにいる集団は、別の集団ということか？  
しかしそう考えるとすなわち、この集団は鳴き声もあげず接近してきたということになる。鳴かずに移動できるのなら、一々自分たちの場所を教える必要はない。

あちらの集団が鳴いて、こちらの集団が鳴かなかった理由がわからない。

「キツキツキー」

「クイツ、クイツ」

すると樹上のキノラツカンたちは、昴を見下ろし、より一層の鳴き声を上げ始めた。

それはまるで、バカな獲物を嘲り笑うような、そんな鳴き声だ。

昴ははたと気づく。

（まさか、こいつら、俺らを……）

昴は、まんまと一杯食わされたことを理解した。

もしかしたら、元からいつでも襲えたが、逃げ惑う姿を観察したかったのか。

いたぶって快感を覚える。そういう余裕と、知力がある生き物か。  
昴はその考えに至り、ぎりりと唇を噛んだ。

「カズミール！ 走れっ！」

しかし、ここでめげている暇はなかった。

昴はカズミールの背中を叩くと、腰から下げたナイフを抜く。

「えっ、兄ちゃ……」

「いいから行けっ！」

硬直するカズミールに活を入れると、カズミールは一瞬泣きそうな顔になった。

しかし判断良く、すぐに前を走り始める。

（村まで、村までどうにか切り抜ければ！）

昴は、カズミールの後について走りだす。  
するとキノラッカン達も追いかけてきた。

「キイツ、キイツ、キーーーーー！」

野性味溢れるその咆哮に、昴はすつと冷や汗を流す。  
もしかして、死ぬかもしれない。  
そんな恐怖が、心胆を寒からしめる。

「キーーーーーッ」

素早いキノラッカンの一匹が、枝を器用に渡ってきた。  
そいつはそのまま上空から、昴に体当りを敢行する。  
昴は咄嗟にそれを避けた。

ドンッ！

鈍い音なり、キノラッカンは地面に打ち付ける。

自滅だった。相当な速度でぶつかつたようだ。

しかし油断はまったくできない。こんな事で終わるようなら、そもそも野生動物なんてやってられない。

予想通り、そのキノラツカンはむくりと起き上がる。

そして長い手足をいっぱいに広げ、奇声を上げながら追ってきた。まるで蜘蛛のようなその姿に、昴は嫌悪感を覚える。

昴はますます速度を上げた。

「カズミール！ 急げ！」

もう振り返る余裕もなかった。

上からは多数、下からは一つ、キーキーという金切り声が迫ってくる。

タフネス、膂力、どれか一つもともに立ち打ちできそうにない。捕まったら終わりである。

「キーキーキー」

「ウツキヤー」

キノラツカンの鳴き声は止まらない。

しかしここで、不測の事態が起きた。

というよりも当然の結果だろうか、歩幅の違いから、カズミールが遅れだしたのだ。

昴は一瞬迷う。

それは、このまま走って逃げるか、カズミールの後ろに回って殿（しんがり）を務めるかの選択だった。

もしカズミールを置いて走れば、逃げ切れる可能性はゼロではない。きつとある程度数が、カズミールに群がるはずだ。その隙を付けば、可能性はある。

昴はそうした一瞬の思考の後、地面に落ちてた石を拾った。

「おら、死ね！ クソエテ公！」

昴は振りかぶり、迫ってくるキノラツカンに向けて、ぶん投げる。しかしそれは、綺麗にかわされる。

当然のことだ。高速で木の枝を渡れるのである。動体視力が悪いわけではない。

「兄ちゃん！」

カズミールが叫ぶ。

「行け、走れ！」

昴の横を、カズミールが通過していく。

昴はカズミールを守ることを選んだのだ。

昴とカズミールは、今日知りあったばかりである。昴も自身、内心で自分をバカだと思う。

しかし培ってきた価値観が叫ぶのだ。

男ならここでこうするべきだろ！ それがかっこいいんだよ！  
その固定観念が、昴の心を動かすのだ。

昴はそれから、追いつがる敵を投石で攻撃する。

上へ下へ、右へ左へ。

しかし一度も当たらない。  
悔しいほどに避けられる。

「キー、キヤッ、キヤッ」

「キヤウキヤウ、キキキッ」

しかし長い。

川までもまだまだ距離があるはずだ。

キノラツカン達は木の上から悠々と追ってきているが、こっちは全力疾走に近い。

しかも一度転けたら終わりのため、神経も相当削られている。

（これ、村まで逃げ切れるか？）

昴は内心で、だいぶ追い詰められていた。

その時、カズミールが叫んだ。

「兄ちゃん！ やばい、上の方や！」

昴が見上げる。

すると前方、上方から、集団から抜け出た一匹が、流星となって落ちてくる。

昴に樹上から体当たりしてきた時と、同じ方法だ。

落下場所は丁度進路上。

つまり行く手を塞がれた格好だ。

「どうしょ……」

「止まるな。突っ切るぞ！」

足を止めかけるカズミールの横を、昴は追い抜き指示を飛ばす。

そしてナイフを握りしめ、そのままキノラツカンに跳びかかった。

「どけえ！」

「キイツ！」

引くな、引くな、絶対に引くな。一歩でも引いたら終わりだぞ。



そう自分に暗示を掛け、恐怖を振り払つての特攻だった。

しかし、肉体のスペックは一目瞭然。

死ぬ気の迫力を纏つても、相打ちするのが関の山だ。

ズグッ

昴の右手に、肉を貫く感触が伝わってくる。

突き刺さったのはキノラツカンの右目であった。

しかしほぼ同時に、昴の肩に衝撃が走る。

それは今まで受けたこともないほどの衝撃で、昴はきりもみしながら吹っ飛んでいく。

そして地面に体を打ち付けた。

「兄ちゃん！」

カズミールの声が耳に届く。

しかしどこにいいのかよくわからない。  
だから叫んだ。

「走れ！とにかく走れ！」

昴は体を起こす。

頭がぐわんぐわんと揺れ、耳鳴りがする。

（まずい、走らなきゃ）

しかしそう思っても体が動かない。

昴は、どしんと尻餅をついた。

「キツキツキ」

「クイツ、クイツ」

目の前にキノラツカンらがどんどん集まってくる。  
昴はゲホツと、息をはく。

「ウキヤー、キャツ、キャツ」  
「キヤウキヤウ、キキキツ」

まずい、囲まれる。

そう思った昴は、むりやりに立ち上がり、定まらない足で地面を蹴る。

そして群れの中で一箇所だけ空いているところに向かって走りだした。

「キー、キヤツ、キヤツ」  
「キヤウキヤウ、キキキツ」

昴はどうか包围を突っ切る。

しかしキノラツカンはまた、追いかけてきた。

もう帰り道の目印も見失った。

自分がどっちに向かっているのかさえわからない。

けれども立ち止まるわけにはいかない。

止まればなぶり殺しにされるのが、目に見えている。

昴は歪む景色の中を、懸命に走る。

ふらつく足を、根性でどうにか前に向ける。

こんな所で死ぬのは絶対に嫌だった。

昴はそれからもひたすら走り続けた。

すでに森は夕陽で赤く染まり、夜も目前になっている。

喉はカラカラで、唾を飲み込みごまかすのも限界に近かった。

「キツキツキー」

「ウキヤー、キヤツ、キヤツ」

キノラツカンはまだ追いかけてきている。

しかしもう奴らが本気でないのはわかっていた。

何となくだが、森の奥へ誘導しているのがわかるのだ。

きつと疲れはてたところを、襲うつもりなのだろう。

しかし昴は、まだ諦めていなかった。

一体多数は無理でも、一対一なら戦えないわけではない。

もちろん素手では無理だが、武器ならいくらでも作り出せる。

洞窟などを見つければ、素材もたくさん手に入るし、一方からの攻撃に集中できる。

だから、洞窟だ。

洞窟を見つければどうにかなる。

昴は、このもらった命を、軽々しく手放すつもりはまるでない。

「ゲホツ、ぐえっ」

昴のひりつく喉から咳が出る。

そういえば、カズミールは生きて帰れただろうか。吹き飛ばされた時にキノラツカンの注意がこちらに向いたから、可能性はある。

しかし、逃げ切れたかというとなかなか難しい。

できれば生き抜いて欲しかった。

じゃないとあの短すぎる生涯は、いくら何でも可哀想だ。

昴は朦朧とする意識の中で考えた。

しかしその時、ふと、昴の足が止まった。

あれ、と昴は思った。

動かさなきゃまずい、しかしまったく動かない。

どんなに力を込めても、足がぴくりともしないのだ。

足の裏に根が張ったかのようなのだ。

脳の命令を、肉体が拒絶する。それは昴にとって初めての経験だ

った。

すると、ドン、という衝撃が背中に襲いかかる。

昴は前のめりに倒れこんだ。

昴は腕を使い、体を回す。

すると、向こうから、のっそりと這ってやってくるキノラッカンの姿が見えた。

ちっ、今まで放って置いたくせに、何だよ、急に。

昴は起き上がり、また走ろうと思う。

しかし足が動かない。

まるで動かない。

あれ？

ボゴンッ

昴は吹っ飛んだ。

何が起こったのか理解出来ない。

それは首から上が吹き飛んだような衝撃だった。

昴の鼻から赤い体液が噴き出した。

「ウキヤー、キヤッ、キヤッ」

「キー、キヤッ、キヤッ」

「キヤウキヤウ、キキキッ」

今まで静かだったキノラッカが一斉に叫びだす。

そして昴はやっと理解した。

もう自分の体が限界で、そしてキノラッカに止めを指されようとしているらしいということに。

(やっべ、どうしよう……)

意識は朦朧としているが、どこか頭は冷静だ。

しかしいい手は浮かばない。

体がまともに動かない。そして相手は魔物と称される野生生物が、大量にいる。

どう考えても詰んでいる。

こんな戦局、誰だってお手上げた。

「キツ、キツ」

キノラツカンの一体が、昴に近づいてきた。

先ほど殴ってきた奴だろう。

しかし反撃する力はすでにない。

「キャツ、キャツ」

キノラツカンは腕を大きく振りかぶった。

ゴウッ。

その時だった。

横の方から突如発生した火焰が、キノラツカンの体を突き抜ける。キノラツカンはたちまち全身火達磨になり、信じられないような叫び声を上げる。

「ギャツ、ギャツギャツ！ グルガギャギギギ、ギユオウウウウ！  
ガッ、ギャギャア」

キノラツカンはのたうち回る。

しかし一度ついた火は消えはしない。

「ギヤオオオオオオ！」

そうしてキノラツカンは、断末魔と共に灰になった。  
先ほどあれだけうるさかった、他のキノラツカンも、言葉を失ったように静かになった。

（なんだ、これ……）

その光景をぼーっと見つめていた昴は、朦朧とする意識の中で、炎が飛んできた方向を見る。

するとそこには、若草色のローブを着て、フードで顔を隠した年齢性別、共に不詳の人物が立っていた。

手には自身の身長ほどもある、大きな杖を携えている。

まるで、お伽話に出てくる魔法使いのようだと昴は思った。

敵か味方が判断がつかない状況であるが、可能性でいったら守ってくれたのだろう。

昴はお礼を言おうと思ったが、それ以上に必死につなぎ止めていた意識が限界だった。

昴の目の前が、ぷつりと電源が切れたように真っ暗になった。

## 07話 アルムシャーシャ

昂は力尽き地面に横たわり、キノラツカンが一匹消し炭になったその戦場で、ローブ姿の人間は立っていた。

いつからいたのか定かではなく、微動だにしないその姿。それはまるで苔むした一本の木のようにも見える。

樹上にいるキノラツカンの仲間達は一斉に吠え出した。

「ウキヤー、キヤツ、キヤツ！」

「キー、キヤツ、キヤツ！」

「キヤウキヤウ、キキキ！」

キノラツカンらは、体全体を使い、威嚇するように木の枝を揺らす。

すると辺り一面が激しく波打ち、まるで森が怒っているかのような様相へと様変わりする。

それはどう見ても、ローブ姿に向けた、己らの力の誇示であった。集団の力を見せつけることで、相手の気力を奪おうとしているのだ。

しかしその中を、ローブ姿の人間は、何事もないように歩き出した。

キノラツカンの敵意などまるで眼中に無いようで、その姿に動じる気配は微塵も見られない。

キノラツカンの威嚇は不発に終わった。

「キツキツキー」

「ウキヤー、キヤツ、キヤツ」

すると短気なものが何匹か、キノラツカンの一部に、その佇まいがよほど腹に据えかねた者がいたらしい。

先ほどの火焰を忘れたのか、上空からローブ姿に体当たりを敢行するものが現れる。

全身を丸め、自身を弾丸とした命知らずの体当たり。

キノラツカンの得意技だ。

しかし、ローブ姿の人間は、その方向を見もせずに杖を振る。ぼわん。

何も無いはずの中空に、光り輝く文様が現れる。

バチン

キノラツカンは、その文様にはじかれた。

「キキッ！」

「キイ！」

キノラツカンは空中で体を捻り、器用に手足で着地する。

まだまだ戦意は喪失していないようで、体勢を立て直し、すぐさま二度目の攻撃に移る。

しかし文様が再び動き、キノラツカンの進路を塞ぐ。

「甘受せよ、あまねく激情の号哭を。駆逐せよ、怨嗟の轟く泣血を」

透き通るような声で、ローブ姿が何か言葉を口にする。

すると文様が、キノラツカンに狙いを定めながら、回転を始めた。

「至言魔法が一つ。火火激荒」

文様は、ローブ姿の言葉の締めと共に、その中心から灼熱の炎を吐き出した。

火焰は唸り、キノラツカンをたちまち飲み込む。



「ギャギーーーー！」

「グギャガギャギャ！」

全身の毛に火がついたキノラツカンは、狂ったように暴れ出す。木にぶつかり、地面でのたうち、悲鳴を上げながらもがき苦しむ。しかしそれも時間の問題だった。

無謀にも攻撃してきたキノラツカンは、やがて力尽き、その体を黒く染め上げた。

森はいつの間にか沈黙している。

まだ上に多数が群がっているキノラツカンは、もうすでに声を出さなくなっていた。

目の前で見せつけられた惨劇に、言葉を失ったようだ。

ローブ姿は、顔を上げる。

するとキノラツカンたちは、鳴き声を上げながら、四方八方に散らばっていく。

こんな化け物の相手はごめんだと、その背中が語っていた。

そしてローブ姿は、鼻に近寄っていく。

倒れている鼻の隣に腰を降ろすと、その口元にそっと耳を近づけた。

呼吸の有無を確認している様子だ。

ローブ姿は頷いた。

そして鼻の肩口と膝下に手を回し、鼻を抱え上げようとす。

「ふんぬぬぬぬ」

しかし予想外に重かったのか、何度挑戦しても持ち上がらない。ローブ姿は、どしん、地面に座り込んだ。

「どうでしょう……。私一人、だと、持ち上がりません」

それはとても可愛らしい声だった。

昴は揺れ動く識閼の狭間で、体中を包む暖かい何かに身を委ねていた。

全身は羽のように軽く感じられ、風が吹けば飛んでいってしまいそうなほどに軽い。

鼻からは若草の匂いが吸い込まれ、心地よい爽やかさが全身を巡る。また、何処から流れてきているのか、美しい旋律が耳に入り、心を落ち着かせる。

昴の疲れきっていた体にそれらは、花に水が染みこむが如く行き渡った。

まるで母体の中のように、昴は不安を忘れていた。

朝露が光に反射して、虫が歌を奏でる早朝に、昴は窓から差し込む日差しを感じて目を覚ます。

(……?)

柔らかいベッド、そこら中から香るハーブの匂い。

昴は自分がどこにいるのかわからなかった。

ただ、ぐっすり眠れていたことはよくわかる。

『キーツ、キーツ、キーツ』

昴は突如、耳に残っていた、おぞましい鳴き声を思い出す。そうだった。まずい、殺される。

昴は反射的にはね起きた。

そして目を疑った。

目の前に広がるのは木造の小さな部屋であった。

（えっ？）

昴はきょとんと放心し、辺りを見回す。

そこは初めて見る場所だった。

変な模様が書き殴られた羊皮紙が散乱し、部屋の角に本が積み重ねられて、机の上にあるのは奇妙な形のランプ、そして椅子に投げ掛けられた若草色のロープ。

（ロープ？）

そこで昴は、あの魔法使いのような、ロープを来た人間の姿を思い出した。

そうだ、確か炎を噴射して助けてくれた……。

あのロープの人が、キノラッカンを焼き殺したのは覚えている。

しかしそれからがわからない。

昴はとりあえず、自分の体を触り、調べてみた。

するといつの間にか、服が着替えさせられていることに気がついた。

今着ているのは、清潔そうな白い肌着だ。彷徨い続けて薄汚れたパーカーではない。

そしてまた、鼻に当てるよう包帯が巻かれていた。

昴が鼻を触つてみると、ずきりと痛んだ。もしかすると、折れているかもしれない。

昴は確信した。

これは介抱してもらった後だと。

ロープ姿の人がどんな人で、どんな理由からかはわからないが、命を救ってくれたのだ。

お礼を言わなくちゃ。

昴はベッドから立ち上がろうとした。

「らん、らん、らん」

するとその時、ドアがひとりでに開き、部屋に人が入ってきた。

昴は言葉を失った。

その人は、しゃらしゃらと揺れる長い銀髪を持った女性だった。陶器のように透き通った白い肌、そして服の上からでもわかる、歩くたびに弾む爆乳の圧倒的な存在感。

獣人、魔物と見てきたが、今一番のファンタジーがそこにあった。たわわたわに実っている。昴の目が釘付けになる。

「るん、るん、るん」

彼女はハミングをしながら、部屋に付けられた窓をあける。

すると爽やかな風が流れこんできた。

彼女の髪は、風になびいてさらさらと揺れる。

それはまるで、一枚の絵画のようにも見えた。

しかしこの女性、胸からは想像がつかないが、どうやらまだ少女のようだった。顔にあどけなさが残っている。

その子は「うん。今日も、いい天気です」とひとりごとをいうと、くるり向き直り、昴の方を見た。

昴と彼女の目と目が合った。

昴はぎこちなく礼をする。

するとその子は目をキラキラと輝かせ、迫ってきた。

「あの、目が、覚めたんですねっ」

彼女は昴のベッドに手をつけ、微妙なカタコトで口を開いた。  
勢いに驚いた昴は、少し身を引きながら「はい」と返事をする。  
彼女は満面の笑みになる。

「体はもう、大丈夫ですか？」

「あつ、おかげ様で。元氣になりました、ありがとうございます」  
「そうですか。よかった、です」

彼女は首を倒し、にへらと笑う。

その仕草は、彼女を年齢以上に幼く見せた。  
彼女は興味津々に、昴に顔を近寄せてくる。

「あの、あなた、人間の雄ですか。あつ、男、ですか？」

そして予想外の質問を繰り出した。

昴はもちろん男である。

別に女顔というわけでもない。

（もしかして、男が珍しいのかな？）

こんな辺鄙な場所に住んでいるのなら、十分にありえる話だと思  
い、昴は頷いた。

「ああ、やっぱり。興味深い、です」

彼女はにこにこ笑いながら、何度も頷く。

そしてそのまま、昴をじろじろと観るのだった。

昴はどうしていいか、反応に困る。

何だか動物園の動物になった気分だ。

その時、都合良く、昴の腹がぐーと鳴った。

彼女は手を叩き、立ち上がった。

「あつ、ご飯、あります。食べて下さい」

彼女は昴の返事も聞かず、駆け足で部屋を出ていった。

そして向こうで「お母さん、お母さん。ご飯をあげたいんです」と消え入る声で話し始めた。

昴はお言葉に甘えることにした。

（しかし、ここどこだ？）

昴は窓から外を眺める。

そこには深い森が広がっていた。

群生している針葉樹から、逃げ回っていた森だと判断できる。

しかし、不思議なことに辺りには家が一軒もない。

昴は起き上がり、ついでに窓から外に身を乗り出してみた。

するとそこには奇妙な光景が広がっていた。

まるで森の侵入を拒んでいるかのように、この家の周りだけ花が咲いているのである。

（これまた気合の入ったガーデニングだな）

などと昴は考える。

しかし、よくよく考えるとどう考えてもおかしかった。

森の中の一軒家、それにこんな労力をかけるはずがないのである。そもそもこの森は魔物が出るのだ。人が暮らすには、あまりにも危険すぎる。

何か事情があるんだろうか……。でないとさすがに割りに合わない。

それに森の中ならば、村人たちが知らないはずもなかった。

彼らにとってここらは縄張り。隅から隅まで、熟知しているはずだ。

黙認されているということか、はたまた無視されているのか、それとも恐れられているのか……。

昴はあのキノラツカンを焼き殺した火炎放射を思い出す。

あれはまさに魔法のようだった。というよりも、多分本物の魔法なんだろうと昴は思う。

それを証するように、部屋に散らばっている紙、その一枚一枚には、美しく、整った文様が描かれている。

これがただの絵だとは、どうしても思えなかった。きっと何かしらの意味があり、力が込められているのだろう。

中世で魔女が迫害されたように、彼女らもまたそうなのかもしれないと、昴は思うのだった。

彼女が持ってきた食事は、シンプルな肉団子のスープであった。

昴がそれを飲むと、体中に染み渡るのがわかった。

あれほどの運動の後、結構な睡眠をとったのだ。思った以上にお腹が減っていたようだ。

「おいしい、ですか？」

彼女は心配そうな瞳で、聞いてくる。

「はい。めっちゃくちゃおいしいです」

すると彼女は破顔した。

そして嬉しそうに身をくねらす。

「ふひゅ、ふひひつ、はひゅ」

彼女は奇妙な声を出し、赤面する。  
一体どれだけ嬉しいのか、彼女のツボが、いまいち掴めない昴である。

しかしこの笑い方は……。  
かわいいのにもつたいなさ過ぎるだろ、と昴は思う。

「あの、私、アルムシャーシャ、って言います。でも長いから、お母さんは、アルム、って呼びます」

彼女はふと、そんなことを口にした。

「ああ、アルムシャーシャ……さんですか。俺は昴です、よろしく」

昴は一瞬、“ちゃん”が“さん”が敬称で迷う。

見た目的には年下のようなだが、相手が美人過ぎることと、世話をしてもらっていることから、無難に“さん”を選んだ。

「アルムで、いいです。長いですから」

「そうですか？ わかりました。アルムさん」

「ふひゅっ、あっ、スバルって、とても綺麗な名前、ですね」

「アルムさんも綺麗ですよ」

アルムはにへらと笑う。

「あっ、ご飯、おかわりいりますか？」

「あっ、じゃあ、頂きます」

空になった器を受け取り、アルムは部屋を出ていこうとする。  
しかしドアの所で足を止めると、振り返る。



「あの、ゆっくりしていつて、下さいね。私、誰かと話せて、すごく嬉しいですから」

アルムはそう言うと、パタパタと走るように部屋を出た。

それを聞いて昴は、なんとなく彼女のこれまでの生活を理解する。予想は当たらずとも、遠からずというところか。

しかし、この世界にやってきて、他人の世話になりっぱなしだと昴は一人思うのだった。

## 08話 母の願い

昴は食事をしながら、アルムと会話を続けていた。

アルムは外の世界に興味があるようで、執拗に聞きたがる。

しかし昴は、この世界のことなど、何も知らない。

まだ来たばかりなのだ。答えられるはずがない。

昴はそのことに関して、言葉を濁すことしかできなかった。

するとアルムはひどく残念がった。

昴は申し訳なく思ったが、どうしようもない。下手な嘘を言うわけにもいかないのだ。

しかし代わりにはいつては何だが、アルムのことをいろいろと聞く。

するとアルムはすぐに機嫌を直し、喜んで話をしてくれた。

モノごころが付く前に父を亡くしたこと。そしてずっとこの森で住んでいること。本が好きで、部屋を埋めつくす本の全てを暗記しており、そして魔法が使えること。

やはり彼女は、『魔法使い』であつたようだ。

そこで昴は、よければどんなものか見せて欲しいと頼んでみた。

すると彼女は嬉々として披露してくれた。

魔法に必要なのは“詠唱”と“魔方陣”の二つで、その組み合わせを変化させることにより、様々な効果を発揮するらしい。光球を生み出したり、火を放ったり、かまいたちを巻き起こしたりと、いろいろだ。

ちなみにアルムが得意とするのは、“光”と“火”と“水”の呪文らしく、キノラツカンを追い払った時は、杖に仕込んでいた火炎呪文を使ったとのことだった。

その話を聞いた昴は、そういえばお礼がまだだったと、アルムに頭を下げた。

しかしアルムは、何でもないよ、と気にしていないふうだった。  
昴はアルムの優しさに、より一層感謝した。

そして日が昇りきった頃、昴はそろそろ村に帰ろうと思った。

途中ではぐれたカズミールのことも気にかかるし、村人たちが心配しているかもしれない。だから早く、元気な姿を見せる必要があった。

で、本当に心苦しいことなのだが、アルムに道案内をお願いする。道中は危険であるし、道もわからない。

どうしてもアルムの力が必要だった。

アルムも村のことを知っており、何度か遠巻きに眺めていたと聞いている。だから、場所はわかるはずだ。接触は母親に禁じられているらしいから、送る場所は川までで構わない。

もちろん、命を救ってくれたお礼は、するつもりだ。

再びここに来て、自分にできることなら、どんなことでも聞こう。命の対価としては、それだけでは不釣り合いかもしれないが、せめてそうするべきだ。

それが誠意だと昴は考える。

昴は深々と頭を下げた。

アルムは泣きそうになった。

帰る、という発言に、ショックを受けていた。

昴は戸惑う。

しかしどうしようもなかった。

一度は絶対に帰らなければならないのだ。  
いつまでもここにいてはいいかなかった。  
しかしアルムは言う。

「あの、夕御飯、おいしいです」  
そしてまた呟く、

「今からだと、村に着くのは遅くです」  
小さくなり、もじもじとするその姿は、まるで言い訳をする子ども

ものようだった。

昴は自分の頭を押さえる。

そして大きく息を吐いた。

「わかりました。じゃあ、あと一日だけ」

アルムはぱあつと笑顔になった。

今までベッドの上で食事してきた昴であるが、夕食は家の中央にある食卓に招かれることになった。

アルムは腕によりをかけると張り切っており、先程から一人、台所にこもっている。

昴は頃合いを見計らって、食堂へお邪魔した。料理の手伝いは断られてしまったのだが、せめて配膳くらいはしようと思ったのだ。

昴は木でできた蝶番（ちょうつがい）のドアを開ける。

するとそこには、アルムの母であろう人物がすでに来ており、椅子に座り読書をしていた。

昴は驚いた。

なんと、その人物、耳が長かった。

長く輝く銀髪に、透き通るような白い肌。そして娘に受け継がれた必要以上の巨乳。それらはどう見ても、アルムの血縁者であることを示している。

しかし耳だけは違った。

アルムは普通の耳であるが、母親の方は先端が伸びて尖っている。

『エルフ』という言葉が昴の頭に浮かぶ。

「あれ、スバル。もう来たんですか？」

するとその時、アルムが台所からひょっこりと顔を出した。エプロンを身につけ、鼻に煤がついている。

「あつ、少しぐらい手伝おうかと思って……」

昴は言う。

しかし思考はアルムの母親の方に向いていた。

（何？ アルムのお母さんってエルフなの？）

アルムは美人であるが、見た目は人間である。

しかし母はエルフ。

ということは父が人間で、アルムはハーフになるのだろうか。

そう考えるところでしっくりくるし、村人との接触が禁じられているのもわかる気がする。

昴はなんとなく、二人の事情を察した。

するとその時、アルムの母親が視線を上げてくる。

昴と母親の目が交差した。

「あつ、どうも初めまして。お世話になっている、昴です」

昴は咄嗟に礼をする。

しかしアルムの母は、どうでもよいように、再び本に視線を落とした。

「そう。ゆっくりしていきなさい」

一応は歓迎の言葉を言ってくれる。

しかし冷淡な声だった。

言葉の調子から、相手の感情がまったく読み取れない。

拒絶されているわけではなさそうだが、喜んでいるわけでもない。むしろ無関心というべきか。

しかし、艶やかな女性だった。  
表情が一定で、常に冷静そうな顔をしており、気品がある。  
昴は少しだけ、見とれた。

それから、昴は遠慮するアルムに無理を言って、手伝いをさせてもらう。

ゆで卵くらいしか作れない昴なので、配膳くらいしかまともにできなかったが、アルムは喜んでいた。

そうして並べられた料理は、豪勢なものだった。

肉の串焼きを始めとした数々の肉料理に、魚の塩焼きに野菜の和え物。卓の中央には、山盛りのフルーツが並び、幼虫や昆虫の煮物というゲテモノに近い物まである。

とてもじゃないが、食い切れない量だ。

そして昴もアルムも席につき、「いただきます」の合図と共に食事始める。

「スバル。あの、どうですか？」

食事を始めて、数分後、アルムが恐る恐る聞いてきた。

「ん？ ああ、めっちゃおいしいです」

昴は礼賛の言葉を返す。

しかしそれは、お世辞なしの本音だった。

肉は柔らかくで口の中でとろけるようで、肉汁も嚙むことに溢れてくる。

魚は身が締まっております塩がきいて味が濃く、昆虫の煮物も歯ごたえがある。

どれも文句なく美味であった。

「うひゅ、ふひゅひゅ」

アルムは嬉しそうに、身をくねらせる。  
恥ずかしいのか、顔が真っ赤に染め上げる。

「アルム……」

すると、先ほどまで黙々と食していた、アルムの母親が口を開いた。

相変わらずの無表情であるが、食は進んでいるようだ。  
きつと娘を褒めるのだろう、と昂は思う。

「何ですか、お母さん」

笑顔で聞くアルムに、母親は平坦な声で言った。

「あなた、旅に出なさい」

無表情、無感動、無関心、そんな能面のような顔で、母親はきつぱりと言い放った。

「え？」

昂は聞き違いじゃないかと、耳を疑う。

アルムの母親は、横においてあったナプキンで口を拭う。

「アルムは外に出たかったのでしょうか？　これを機会に、この人と世界を回りなさい」

これはもう決定事項だと、母親は言っていた。

昴は言葉を失った。

あまりにも予想外の言葉だった。

「えっ、いいんですか。お母さん」

アルムは満面の笑みを見せる。

「ええ、あなたももう大きい。認めましょう。そしてスバルといいましたね。この子を連れて行ってもらえますか？」

いきなり話を振られた昴は、当惑した。

良い話には違いない。

アルムは魔法が使えるというから、腕もたつし、料理もできる。

いきなり一人旅するのに比べたら、天と地ほども違うだろう。出来すぎのパートナーだ。

しかし、疑問が残る。

「あの、僕、男ですよ？」

知らない男に、娘を預ける。

母親のその胸中が理解出来なかった。

「それは関係有りません。それともアルムは足手まといになりますか？」

「いえ、そういうわけではないんですが……」

「では、お願いしたいのですが、どうでしょうか？」

理解出来ない。

まったくもって理解できなかった。

しかし、断る理由もない。



「あの、僕は構いませんが……」

すると母親は、初めて笑顔を見せた。

にこりと、何か吹っ切れたような顔であった。

昴は面食らう。

こんな表情もできるんだ。

そして母親は両手をパンと叩く。

「決まりですね」

そして母親はアルムの方を見た。

「アルム。巣立ちの時です。もうここに帰ってきてはいけませんよ」

「えっ？」

アルムは目をぱちぱちとする。

「帰ってきては、いけないんですか？」

「そうです」

それを聞いた昴は絶句した。

それは遠まわしの、絶縁宣言であった。

「えっ、な、何ですか？」

アルムが尋ねる。

すると母親は、アルムの頬に手を回した。

「あなたは、ここで一生を過ごす気ですか？ この深い森の中で、

ずーっと」

アルムはびくり、と身を固くした。  
そして俯く。

どうやら答えたくないようだ。

「アルム。旅にでるのです。危険なこともきつとあるでしょう。しかし幸せもきつと見つかるはずですよ」

アルムは顔を上げた。

「なら、お母さんも、一緒に……」

しかし母親は左右に首を振る。

「わたしは、あの人の眠るこの地に骨を埋めます。それが、わたしの幸せですよ」

それはとても優しい微笑みだった。

それを見ると、昴もアルムも何も言えなくなってしまふ。

母親はテーブルに向き直った。

「中断してしまいましたね。では、食事を続けましょうか」

いつの間にか、母親の顔は無表情に戻っていた。

辺りにカチャカチャと、ナイフとフォークの音が響く。

昴もアルムも手を動かさない。

団欒の空気はすでになかった。

昴はアルムの気持ちを思うと、どんな顔をすればいいのかわからない。

冷たい静寂が辺りを包んだ。

昴は肉を口に運んだが、何の味もしなかった。

夜、昴はベッドに寝転んでいた。

魔法のランプの灯りを頼りに、天井を見つめ、染みを数える。

明日、昴とアルムは出発することになっていた。

急な話だ。

昴もいまだ信じられない。

明日アルムになんて言おうか。

そんなことばかり考えている。

するとその時、ドアがコンコンと鳴った。

「あつ、はい」

昴が返事すると、ドアがゆっくりと開いていく。

そして入ってきたのは、長い耳をした妙齢の女性だった。

水浴びをしてきたのか髪がしっとりと濡れており、妖美な雰囲気  
を醸し出している。

昴は目を白黒させた。

それはアルムの母親であった。

「夜分遅くに、失礼します」

母親のきめ細やか絹のような声に、はっと意識を取り戻した昴は、  
慌てて立とうとする。

しかし母親の手を前に出し、そのまま構わないと促した。

昴は、ベッドに腰を落ち着ける。

「隣、よろしいのですか？」

「あつ、はい。もちろんです」

昴はベッドの横へ、体をずらした。

そして空いたスペースに、母親は腰を下ろす。

すると昴は花のような甘い蜜の匂いを覚えた。

クラリとするような、そんな匂いだ。

母親と昴の目が合った。

「スバルさん。娘をよろしく願いします」

母親はゆったりとした口調で言ってきた。

表情は、相変わらずの無表情だ。

感情が読めないことが不安であつたが、昴はしっかりと頷いた。

「僕の、出来る限りですが」

すると母親は満足したのか、頷いた。

そして窓の外へと視線を向けていく。

窓の外では、チリリ、チリリと虫が鳴いており、月が雲に半身を隠している。

窓から爽やかな風が入り込んでくる。

それは昴と母親の、髪を揺らした。

（まさか、これだけを言いに来たんじゃないよな……？）

入ってきた時は、何だかただならぬ雰囲気を感じたものだ。

昴は母親の次の言葉を待つ。

やがて母親は、口を開く。

「あなたは、わたしをひどい母親だと思うかしら？」

それは突然の質問だった。

昴は即答できなかった。

そして一呼吸の間の後、母親は続けて話してくる。

「わたしは、見ての通りエルフです。そしてあの子は、人間とエルフのハーフ。種族を超えた愛の末、授かった一粒種」

それは昴が想像したとおりだった。

昴はこくりと頷く。

「そのことに後悔はないし、わたしはあの子のことを愛しています。しかし、今なら何故、人間とエルフが交わることが禁忌なのか、よくわかる」

すると母親の鉄面皮の上に、一筋の雫がほろりと流れた。

それは頬をつたい、顎の先から地面に落ちる。

昴はこくりと息を呑んだ。

「あの子とわたしでは、寿命が違う……」

母親は無表情ではあったが、肩と口唇を震わしていた。

昴は言葉を失った。

「あの子はわたしより、早く死ぬの」

母親の瞳から、また涙が溢れてくる。

「わたしは一緒に行けません。もし行けば、離れられなくなる。そ

してあの子の最後を見届けることになってしまつ。それが、それが恐ろしいの……」

昂には返す言葉が見つからない。

「ここには大事な人が眠っています。だからわたしはここで死ぬ。それは怖くない。でも、あの子には、どうしても幸せになつて欲しい。それは親のわがままかしら？」

母親は、濡れる瞳で昂を見た。

二人の目と目が合う。

「あの子を連れて行つて、見届けてくれないかしら」

母親の台詞に、昂は胸を押さえた。

そして吐き出すように言う。

「なんで、僕なんですか？　僕なんて、昨日今日会つたばかりなのに……」

正直なところ、いきなりで重すぎた。

偶然、たまたま会つただけなのだ。はっきりいって自信がない。すると母親が言った。

「運命、かしらね。わたしがあの人と出会つたのも、運命だったわ」  
母親はどこか遠くを眺めるようだった。  
そして昂の手をつかむ。

「あの子の巣立ちは時間の問題だった。わたしはそろそろ、ひとり

でも旅立たせるつもりだったの。でも、あなたが来た。身を縛られない、自由な人が。これって運命じゃないかしら？」

母親は、いつの間にか昴のことを知っていた。

どうやらアルムに聞いたようだ。

「あの子は優しくていい子よ。魔法の腕も一流。ユージュリ族の祈禱師、氷姫の名を受け継ぐわたしの娘ですもの。きっと足手まといにはならないわ」

昴は呟く。

「でも、そんな彼女を僕が裏切るかもしれませんよ。心配はないんですか」

母親は頭を左右に振る。

「いいえ、あなたはそんなことをしないわ。わたし、一目で分かったの。この子、あの人によく似てるって」

「それは、お父さんのこと、ですか？」

「ええ、わたしの愛してやまない人よ。不器用で、臆病で、心配性でも、人を傷つけない強さを持っていたわ。それを弱さという人もいたけれど、わたしはあの子のそんなところを何よりも信頼していたの」

母親は昴の頭を引き寄せた。

「身の程知らずのかっこつけ。でもそれは立派な“騎士（ナイト）の資質”よ」

昂は母親の胸に埋もれる。  
顔が熱くなるのがわかった。

「あなたはアルムを守ってくれると思うの。というよりも、あなたはあの子を傷つけられないでしょう?」

見透かされてる。

昂はそう思った。

例えアルムに裏切られたとしても、俺は彼女を恨めないだろう。  
そういう性格をしているのは、自分でよくわかっている。

「あの子を、お願い……」

母親の真摯な訴えに、昂は答えた。

「はい」

それから一時の後、母親は立ち上がった。

昂が見上げると、その顔は相変わらずの無表情であった。

「わたしはあの子と最後の会話をしてくるわ。ありがとう。おやすみなさい」

「はい。おやすみなさい」

そうして母親は部屋を出ていく。

しかし最後に振り返ったその表情は、見たこともないほどの笑顔であった。

慈しみ、愛し、願う。

その魂が、全て含まれている気がした。

昂はその背中をそっと見送った。



外では月が、雲から顔を覗かせていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7694x/>

---

異世界で武器行商人始めました

2011年10月27日23時36分発行